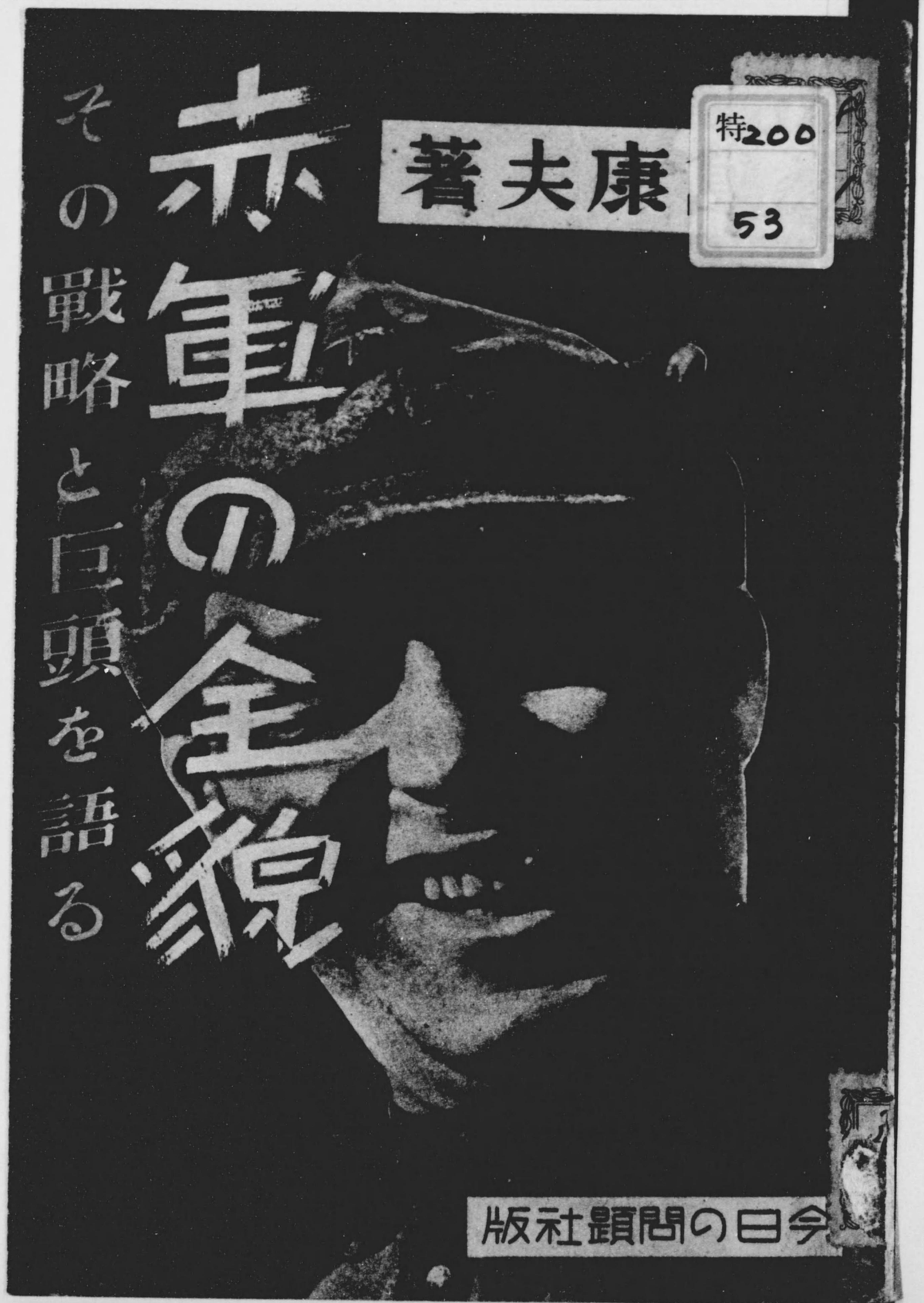


特200
53

②

0056361000

0056361-000

特２００－５３

赤軍の全貌

三島康夫・著

今日の問題社

昭和１１

AJC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

赤軍の金線

その戦略と巨頭を語る

康夫著

特200
53

今日の問題社版

特200
53

帝國圖書館藏

三島康夫著

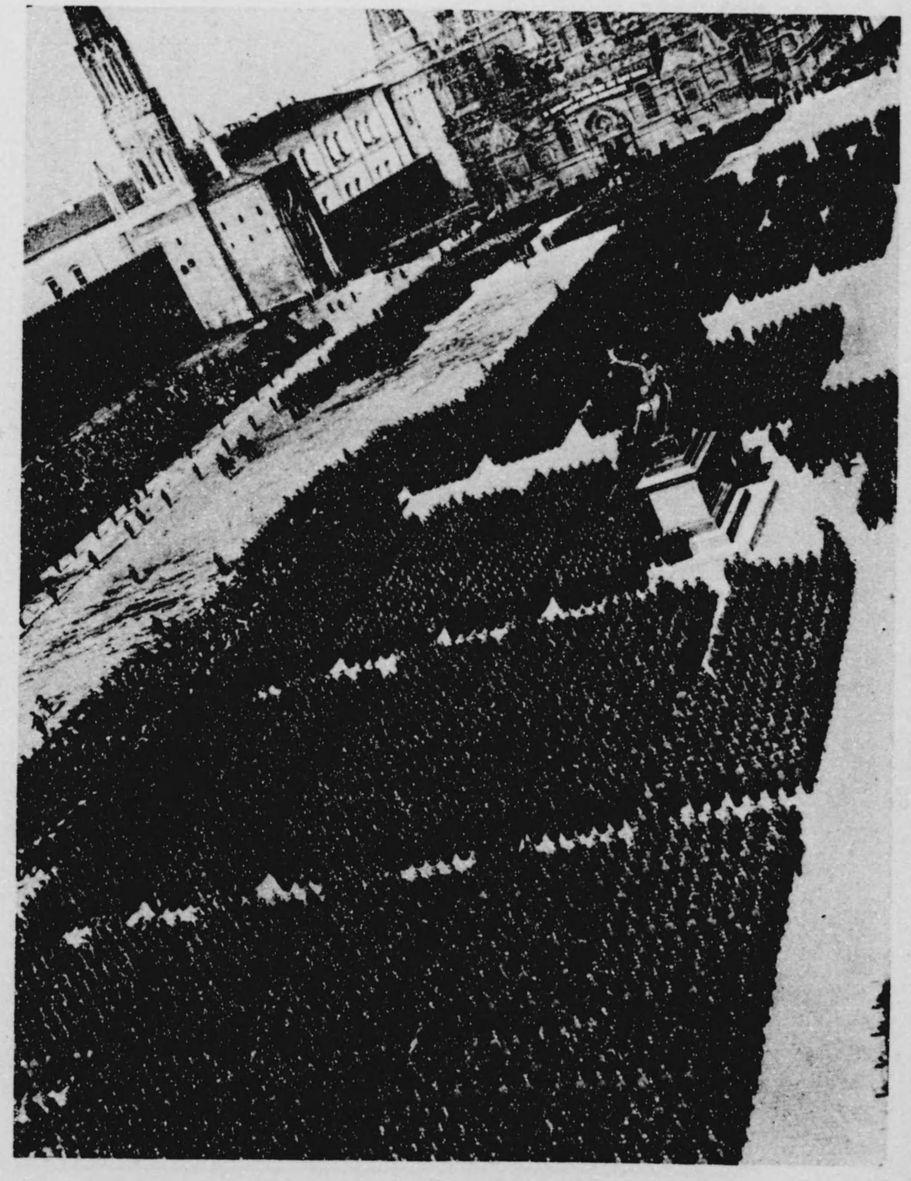
赤軍の全貌

其の戰略と巨頭を語る

今日の問題社版

昭和一・六・五 帝國圖書館

赤軍入隊宣誓式——モスクワの赤い廣場に整列
したる赤軍兵士が、海陸軍人民委員長ヴォロシロフの
言葉を聲高に唱へて、赤軍入隊宣誓を終し、光榮ある



モスクワの赤の廣場に集結した赤軍

目次

赤軍の戰略……（五）
一、赤軍と將來戰……（五）
二、赤軍の戰爭論……（一〇）
三、赤軍の對將來戰觀……（一七）
四、赤軍の戰略論……（二一）
五、傳統の消耗戰理論……（二五）
六、殲滅戰理論の勝利……（三〇）
七、少數軍か大衆軍か……（三六）
八、赤軍が誇る『深き戰術』……（四五）
九、極東軍備の意義……（五四）

赤軍の巨頭を語る……（五九）
一、行詰つた赤軍人事……（五九）
二、元帥・ヴオロシロフ……（六五）
三、元帥・ブデイヨンヌイ……（七三）
四、元帥・トハチエフスキー……（七七）
五、元帥・ブリユツヘル……（七九）
六、其他の人々……（八二）

赤軍の戰略

兵者國之大事、死生之地、存亡之道也、
不ㇾ可ㇾ不ㇾ察也。（孫子）

一、赤軍と將來戰

近代戰の特質を最も良く理解し、將來戰の全貌を最も正確に豫想して居るものは、或はドイツであるかも知れない。

だが、その理解なり豫想なりに對して、國家の戰爭準備を、最も良く順應せしめる爲め最大の努力を拂つて居るものは、恐らくソヴエート聯邦ではないだらうか。

次々と白日の下に露はれて來るドイツの地下軍備——ヴエルサイユ條約、巴里軍事協約

等に拘束されて居た爲めに、秘密に併し營々として作り上げられて居た復興軍備――は、當に三嘆に値する強大、深刻さうして精緻なものであることを想はせる。けれども、それは、何と言つても聯合國の監視の眼を掠めて作つたものであつた。

然るに、ソ聯は、公然且つ堂々と近代戰のための軍備整備に一路邁進して來た。共産黨の獨裁政治の下に、スターリンとそのスタッフの一つの意志のまゝに、共産計畫經濟の全能力を擧げて、將來戰の用意に直往して來た。

ソ聯が五年計畫を實施した直前から今日に至る迄の過去十ケ年に於ける、國家活動は、悉く擧げて戰爭準備に向けて居た、といふ事が出來る。

事實上の獨裁者である共産黨の書記長スターリンを始め、總理大臣であるモロトフ、國防大臣であるウオロシーロフ、次官として寧ろ專問的にはウオロシーロフの指導者でもあるトハチエフスキー、外務大臣たるリトヴイノフ、極東軍司令官ブリユッヘル等、ソ聯の實際指導階級の巨頭が口を揃へて軍備は充實せりと揚言して、赤軍の强化を自讃し、背後の總動員準備の完成に近づきつゝあることを唱和してゐるのは、要するに、十年不撓、忍

苦とひたむきな努力の結實が、强大なる赤軍として現はれた事を、彼等自身半ば有頂天になつて眺めてゐるのだ、といふ事が出來る。

『五年計畫の課題は外部よりの軍事干渉、攻擊の凡ゆる企圖を斷乎排擊する事を得せしめる國防能力を、最大限度に高める爲め一切の技術的、經濟的前提條件を作り出すに在つた』（スターリン）

『反ソヴエート各國軍の技術的軍備が高度である結果、赤軍は最短期間に軍事技術的方面で、先進資本主義國に追ひ付き追ひ越すべき課題に直面した』（ニコノフ）

かくして彼等は第一次五ケ年計畫で大體追付き、第二次五ケ年計畫で、今正に追ひ越しつゝあり、彼は更に引き離さうとしてゐるのだ。

さうして、それはソ聯巨頭、特に赤軍幹部の萬全の用意からに外ならない。

是ノ故ニ勝兵先ツ勝チテ而後ニ求レ戰ヲ、敗兵先ツ戰ヒテ而後ニ求レ勝ヲ。（孫子）

名將は、無理な戰爭をしないで、勝算あるに至つて甫めて戰爭をする。兎も角やつて見ろ、なんといふのはない、と孫子が言つてゐる。

帝制ロシアは、日露戰に一敗地に塗れた。歐洲大戰にも潰亂敗走した。赤軍はその直後の對波蘭戰、對獨戰及び所謂國內戰に於て、終極の戰捷を收めた。赤軍はこの戰捷の記憶を革命の完勝と共に固く胸に抱いてゐる。

だが今日、赤軍巨頭の胸中に來往する一抹の不安は、國內戰は、事實に於て特殊の情勢に於て鬪はれたものであつて、之を以て、大規模な、綜合的な科學戰であり機械戰である將來戰と同日に談じ、同樣の赫々たる完勝を期待し得るとは考へられないといふ事である。それが五ヶ年計畫への狂奔の理由である。

殊にその唯物的思想は、極度に戰用資材の充實に集中されてゐる。戰略、戰術並に軍紀士氣を極めて重視してゐることは勿論であるが、之と同時に、資材の充實を絕對不可缺の重要條件として重視してゐる。それがなければ、勝利は不可能であるとしてゐる。

赤軍戰略思想家の言を見れば、それは明かである。

『道德的、政治的確固性、戰鬪に對する不抜の意思、戰爭の由つて起れる思想に對する忠實——總て是等は戰鬪の成功、戰爭の勝利を得る爲めに最重要の條件である。……然し乍

ら……不充分に武裝し、不充分なる手段を以て、戰鬪に參加せしむる……場合には、軍隊は想像すべからざる程の多大の損害を蒙り、且つ忽ちにして戰爭に不可缺なるその良好なる質を失ふに至るであらう。即ち彼等は戰勝の可能性に對し信用を失ふであらう』（トリアンダフイーロフ）

一九三二年、參謀次長の現職のまゝ飛行機と共に墜死したトリアンダフイーロフは、赤軍最近の戰略家中第一に推されてゐる人物であつた。さうして彼はその著『現代戰の特質』（一九二七年）に於て右の如く述べ、他の諸々に於て、同樣の趣旨を述べ、充分なる裝備なき軍の必敗を力說し、之を歐洲大戰に於ける實際數字から將來戰に於ける豫想數字を算出し、必須の機械化、資材數量等の、戰捷に不可缺なることを明かにしてゐる。

ソ聯の五ヶ年計畫は、彼等戰略家の理論がスターリン等の世界共產主義化の理論と結び付いた結果に外ならない。

かくして彼等は、一方に於て必勝不敗の物的整備の完了に努めつゝ、他方に於て、政略戰略、戰術の練成に、或は國民の精神的訓練に寧日がなかつたのである。

二、赤軍の戰爭論

赤軍の戰爭論は、その淵源をプロシヤの戰略家フオン・クラウゼヴイツツ大將に發し、近世社會主義の鼻祖マルクス及びエンゲルスに依つて修正敷衍され、ソヴエート聯邦の建國者たるレーニンに依つて大成されたものである。

クラウゼヴイツツは、近代戰の創始者と云はれるナポレオンをその研究の主たる對象として刻苦十二年、未定稿の一卷『戰爭論』を書き遺して死んだ(一八三一年)。その翌年出版された彼の『戰爭論』は、凡そ軍事に關心を持つ者の必讀の名著となつたものであるが彼はその中に於て、戰爭は一の政治形態に外ならないと喝破した。

彼は次の如く言つてゐる。

『戰爭は政治的交通の一手段に過ぎず、それ故に決して獨立的なるものではない。勿論戰爭が諸政府及び諸國民の政治的關係によつてのみ惹起されるといふ事は、誰もが知つてゐる事である。然し人は普通此の事を次の樣に考へてゐる。曰く、戰爭の勃發と共にかの政

治的關係は中絶し、獨特の法則に從ふ所の全然異つた狀態が成立するのである』と。

『然し吾々は之に對して次の如く主張する、曰く、戰爭は他の手段を用ひる所の、政治的關係の繼續に過ぎぬ』と。

又、次の如く言つてゐる。

『現實の戰爭に就て見れば、戰爭は、單なる敵愾心の發露ではなく、政治それ自體の表現に過ぎないのである。然りとすれば政治的着眼點を軍事的着眼點の下位に置くのは不條理であると云はねばならぬ。蓋し政治が戰爭を生んだのであるからだ。政治が主宰者で、戰爭は手段に過ぎない、その逆では決してない。』

『之を要するに兵術は、最も高い見地より見る時、政治となる、但し此の政治たるや、外交文書を往復する代りに、會議を實行する所の政治である』

詮り戰爭は全體としての政治の一部分に過ぎない。從つて、政治が大規模であれば戰爭も大規模になるといふ樣に、戰爭の特質も政治の特質に從ふものである、といふのである。

それ故に、彼は、ナポレオン戰爭以後の戰爭を國民戰爭として理解した。蓋し彼の生存して來た時代は、資本主義、民主主義、自由主義が漸くそのフォームに入らんとした時代さうして國民主義が大いに興起した時代であり、從つて、政治は是等の型に於て指導されてゐたからである。

マルクス及びエンゲルスは、クラウゼヴイツツの戰爭論を唯物史觀的に理解し、階級鬪爭の理論を以て掘り下げたのである。

即ち彼等は、政治は經濟の集中的表現、謂はゞ、經濟の反映たるに過ぎず、言ひ換へれば政治關係は生產關係に依存し、一定の政治關係は一定の生產段階に順應するものであると見るのである。

そこで、彼等に於ては、戰爭は、政治や外交と同じくその基礎的事象たる經濟關係の一表現であり、經濟鬪爭の一手段に外ならない。と同時に、戰爭の樣式も全く經濟の發展段階に制約される。

そこでエンゲルスは云ふ。

『實に軍隊や艦隊ほど經濟條件に依存するものはない。裝備、編成、組織、戰略及び戰術は、何よりもその時々の生產段階や運輸狀態に依存する。これらに革命的影響を與へたものは、天才的將軍の『悟性の自由なる創造』ではなくて、よりよき武器の發明と兵器材料の變化とであつた。そして天才的將軍の影響は、精々戰鬪方法を新たなる武器と戰鬪員とに適應させる以上に出でないのである』

それ故、エンゲルスに依れば、十九世紀の始め、火藥がアラビア人から西ヨーロッパ人に傳へられて戰爭が全く一變し、槍や刀の密集戰鬪隊形は燧發銃の發明に依つて橫隊となり、ライフル銃の發明に依つて散兵隊形となつた。さうして機關銃及び輕機關銃の發明に依つて群戰鬪法が採用せられる樣になつた。遭遇戰に於ける疾速なる近接は機關銃彈の大量發射に依つて遲滯する坑道戰となり塹壕戰となり、更に步兵の砲兵化——步砲兵のより緊密なる連繫を產むだ。

タンク、毒瓦斯、飛行機の發明使用に至つて、所謂近代戰の特質を現はし、戰場と非戰

場、戰鬪員と非戰鬪員との區別をさへ抹消して了つた。

同樣に、兵卒材料の變化も亦戰爭を全く一變して行つた。その顯著の一例としてエンゲルスの研究を擧げて見る。

『近代的用兵術はフランス革命の必然的產物である。その前提はブルジョアジーと零細農民との社會的解放である。ブルジョアジーは金錢を提供し、零細農民は兵卒を提供する。今日の巨大軍隊の成立の爲には此の兩階級は封建的ギルド的桎梏から解放される事が必要であつた。又近代的軍隊に必要な武器、裝備、糧食等の材料を調達し得る爲にも、そして教養ある將校の必要數を提供し、兵卒自身にも必要なる智識を付與する爲にも、此の社會的發展段階と結びついた富と教育との一定の程度が必要であつた。』

詮り封建制度から近代資本主義制度に代つて、戰爭が王侯の職業兵士に依る職業的戰爭から、全國民の事業としての戰爭に進んだのである。

約言すれば戰爭は武器や兵卒材料の進化變轉に應じて變化し、武器や兵卒材料は戰爭そのものと共に總て社會の經濟的進步や政治的變革と密接なる關係に在るといふのである。

之と同時にマルクス・エンゲルスは、戰爭を階級鬪爭との因果關係に於て理解した。即ち政治はブルジョアの階級的政治であり、從つて大衆支配の手段であると解すると同一の解釋を戰爭にも適用してゐる。戰爭は資本家の階級的利害の爲めのものであり、勞働大衆はそのお手傳ひを爲しつゝ搾取されてゐるに過ぎないと解する。

そこで彼等の理解した近代の戰爭は、一、資本主義諸國間の爭覇戰爭、二、對植民地戰爭、三、階級戰爭の三つに分れるのである。

レーニンの戰爭論は、此のマルクス理論の發展大成である。

彼に據れば、戰爭は資本主義がその發展の爲めの侵略、掠奪の戰爭に外ならない。さうして資本主義は近代的、獨占的資本主義に發達した。從つてそれ以後に於ける戰爭は即ち所謂帝國主義の戰爭であつて、歐洲大戰は同盟、協商孰れの側から見ても帝國主義の戰爭世界分割のための、植民地、金融資本の勢力範圍等々の分割及び再分割のための戰爭であつたのである。

さうして彼はこの帝國主義即ち資本主義の獨占段階は既に行詰りを生じ、何等かの變革を遂げなければならない狀勢に到達してゐると見る。彼はそれを二つの方面から觀察する。

その一は、戰爭を階級鬪爭との關聯に於て觀察したもので社會革命必至の結論である。

『帝國主義はプロレタリアートの社會革命の前夜である』といふ言葉が即ちそれである。

そこでプロレタリアートの祖國である事を主張するレーニンの國ソ聯は三つの武力戰爭を想ふのである。(一)は帝國主義祖國がその植民地に行ふ帝國主義戰爭であり、(二)は帝國主義諸國が共通の敵であると思惟するソ聯に對して指向する帝國主義戰爭であり、(三)は帝國主義國同志の間に行はれる帝國主義戰爭である。而うして彼はその(三)を、帝國主義諸國が最後の一大爭覇戰を廻避することが出來ないといふ第二世界大戰として豫言する『爪先まで武裝して世界を支配しつゝある二三の强奪者は、、獲物を分取りし、そして彼等の獲物を分配するための彼等の戰爭に全世界を捲込むのである』と彼は言つてゐる。

さうして是は、彼れのソ聯が、帝國主義の諸國に對して積極的戰爭を仕掛ける絶好の機

會である。

之が赤軍の基本的な戰爭論である。

三、赤軍の對將來戰觀

赤軍が上述の戰爭論から想望する將來戰は、かくして次の如く要約される。

(一)、消極戰爭

(1)、帝國主義諸國に對する反帝國主義の宣傳戰(主として思想戰)

(2)、植民地及び半植民地國に對する煽動戰(主として思想戰、時に武力戰)

(3)、帝國主義諸國の共同戰線に對する防衛戰(當然に全面戰)

(二)、積極戰爭

即ち帝國主義に對する積極的攻擊戰(之亦全面戰)

(1)は累次摘發された如き日本に於ける共產黨の支援がそれで、(2)は印度、支那に現に試みつゝあるもので、支那紅軍の支援操縱の如きは一種の武力戰であり、外蒙、新彊等

の局地に敢行した方策は稍々趣を異にして赤軍的植民地戰といふことが出來る。

防衛戰はソ聯が過去十數年恟々として不安を感じてゐたものであつて、今日迄の外交を含む政略、並びに一切の戰爭準備は、現實には此の一點から急速に行はれて來たものである。各國との不侵略條約、ソ聯包圍聯盟であるなどと言つて居た國際聯盟への加入、共同戰線の打破、各個擊破の準備、帝國主義國との一時的苟合（對佛相互援助條約）等々はその政略的部面であつた。

重點集中主義の計畫經濟、之を維持する爲めの國民經濟生活の抑壓、資本主義國に對する利權政策、クレヂット政策、貨幣政策、ダンピング等に依つて維持せられた二次の五ケ年計畫はその經濟的部面であつた。

さうして武力戰部面に於ては、人員、裝備共に、『追ひ付き追ひ越せ』の標語の下に、五ケ年計畫に依つて十年間の强行軍を續けた。さうしてそれ等は悉く、此の消極的全面戰觀から發足したものであつた。

然し乍ら、彼等が『追ひ越せ』と云つてゐるのは決して單純な消極觀からではなく、ソ

聯國是の當然の要求上、追ひ越した時から積極戰を目標とするものであることを語つてゐる。

彼等は將來戰の可能なる場合に就ては如上の見解を採つてゐるが、同時に、將來戰の特質に對しては次の如き一般的特質と共に、彼等自身即ちプロレタリアートの祖國としてのソ聯が必然に演ずべき役割に依つて生ずるところの一特質をも考察してゐるのである。

それは彼等の戰爭教書の總論に於て說かれてあるが、その要點は左の如くである。

一、ソ國の戰爭××××××××××、プロレタリアの××、××××××××××大衆の利益と永遠の平和とを圖るに在る。

二、將來戰は全國民を網羅する戰爭である。

三、戰線と銃後との間に境界なく戰場は全國土を包含する。

四、武力は直接國家の產業に支持せられる。さうして一國產業の特質は、武備、動員、戰略戰術に迄も緊密な關係を持つものである。

五、近代戰の特質は運用よりも裝備の良否即ち一國工業力に依つてその運命を左右せら

れる所に在る。

六、火力と機動との調和良好な優秀なる敵軍に對する戰爭指導は敵國軍隊を內部的に崩壞せしめるに在る。

七、戰爭の終末は國內に於ける全戰爭遂行力、即ち工業力、人員資源、國民の生活力に致命傷を與へた時始めて求め得るものである。

八、近代戰の特色は平和と戰爭との境界消滅して無宣戰のまゝ戰爭狀態に入ることである。

第一項は、ソ聯の關する限り、總ての戰爭が有つ特色であると共にソ聯の將來戰觀の出發點であり第一義である。そこで、ソ聯が前記の不安解消と右の如き將來戰の特質とから急行軍を試みつゝ、その追ひ越した時から、積極戰へ移行すべきであることは、その理想であり、國是であり、當然であると共に、またその終極でもあるのだ。

赤軍巨頭連の最近の豪語は、畢竟この積極戰への希望を認めて來た結果のものではないだらうか。

されば、資本主義諸國を各個擊破する政略の進行と、資本主義國家間の交戰の機運が益々醞釀されたのと相俟つて、ソ聯は愈々此の希望を大にするであらう。さうして、第三次の五ヶ年計畫を當然に繼續することになるであらう。

何故ならば、彼等の將來戰觀は、かくして未曾有の大規模なる積極戰となるべき勢に在るのであるから、彼等の唯物辨證法的戰爭準備は、必然に一層巨大なるものに擴張されなければならないからである。

四、赤軍の戰略論

赤軍の兵學界を指導して來た人々は、大體に於て帝制露國の參謀將校であつた。が現在では革命後軍籍に投じ、新に赤軍大學を出た人々も漸次現はれて來てゐるやうだ。

併し、戰爭それ自體が赤軍の出現に依つて一變された譯でもないから、その兵學思想も大體に於て歐洲兵學界の通念に從つて居り、歐洲兵學界から新智識を吸收して、之を唯物辨證法化してゐる。從つて歐洲兵學界の變化に從つて赤軍の兵學界も同樣の變化をしてゐ

るやうである。

唯、流石に尖鋭な社會理論を透徹させる國だけあつて、且又大試練の革命戰を克服して來た人種だけあつて、かなり尖鋭な戰略理論も打ち立て、或は尖鋭な戰術も考案してゐる樣である。

是等の新しき考案なり試案なりに對して、徹底的な且つ實踐的な攻竅と批判とを加へるあたり、革命を突破して來た鬪士的氣魄が見える。

決死隊的要素を多分に含んでゐる空中上陸（デサント）の大規模な試みの如き、或はタンクの空輸試驗の如き、孰れもアメリカに於て逸早く試みられたものではあるが、之が一度赤軍に入れば徹底的な究明が行はれる。昨年九月の如き約一聯隊の空中上陸を試みた。之など畢竟深き戰術への一演習に過ぎないが、傍目も觸らぬ潑剌さがある。

それ故、理論鬪爭の如きは、他方に於て、例へばシヤポーシユニコフの『軍の頭腦』の如き極めて眞摯な地味な參謀本部論もあるが、大體に於て頗る派手な樣だ。さうしてその特徴は特に際立つて實證的である。それは彼等の哲學から來た當然の歸結なのであらう。

彼等の戰略理論も戰術理論もレーニン存生の頃から見ると飛躍的な展開を遂げてゐる。さうしてそれは、曩にも一言した樣に歐洲に於ける兵學界の推移と全く同一の步趨を示してゐる。

即ち之を一言以て蔽へば、消極から積極への展開である。之は赤軍兵學界の基本的な、さうして最大の動きであると云へるだらう。

之を人に就て云へば、レーニンからスターリンへ、であるとも云へる。この限りに於てレーニンは過去の人となり了つて居ると云ふことが出來る。

併し、それは、單に歐洲兵學界の變化に連れて變化したばかりではない。ソ聯にはソ聯だけの、赤軍だけの重大な理由があるのである。それは即ち實際軍備の建設成長である。

赤軍の軍備、廣い意味での戰爭準備が、消極的ではあつたが、その對帝國主義戰の理論その戰略的觀點から、追ひ付き追ひ越せとばかり、建設增强に着手されたのである。ところがその結果、彼等の計畫通りではなかつたかも知れないが、同時に彼等の所期以上な進展强化を見た。さうしてこの實軍備の强化進展は必然に彼等の戰略理論を修正させること

ゝなつたのである。

レーニンが過去の人となつたのも、スヴエーチンが葬られたのも、結局は赤軍戰備の急速な强化であつた。如何に歐洲が積極化し、歐洲兵學界が消極理論を廢棄したとしても、若しソ聯の軍備がレーニンの時代を彷徨し、獨、佛、波蘭等の諸國並に近代化され、充實されなかつたとしたら、またされ得ない一般社會情勢に在つたとしたら、彼等と雖も容易に消極戰法を揚棄し得なかつたであらう。

兎もあれ、赤軍は既に、宗全に積極化した。彼等がどんな理論的飛躍を遂げて、どんな尖鋭戰法を展開しないとも限らない。

第三軍戰術と之を指導すべき第三軍戰略とでも云ふべきものは、赤軍が既に實踐してゐる。即ちそれは支那に於ける共產軍の創設並にその操縱が是れである。謂はゞ敵軍中に敵の敵軍を作り、敵國の腹中に我が友軍を存在させる思想である。この思想は革命軍の國內戰時代に於けるパルチザン戰法と充分なる脈絡を有するものであり、空中上陸の如きも一點相通ずる着想であるといへるであらう。

五、傳統の消耗戰理論

赤軍兵學界で最初に大きな問題となつたのは、『消耗戰か殲滅戰か』であつた。さうして殲滅戰理論が勝を制したのである。

消耗戰理論の鬪士はア・スヴエーチン教授であつた。彼は帝制時代の軍事アカデミーの兵學教官であつたが、革命後ボリシエヴイーキに投じ、レーニンの萬能時代にレーニンの思想を以て從來の彼の兵學思想を修訂し、赤軍大學に於て戰略を講じた。

彼の戰略論は、その講義を纏めた『戰略』に盛られてゐる。

彼の消耗戰理論なるものは結局は同一思想であるが二方面から觀察することが出來る。

その第一は戰爭の區分に對する觀察で、彼は決戰と持久戰とに就て次の如く言つた。

『決戰と持久戰とは各戰爭毎に適用すべきものに非ずして、一戰爭中に決戰と持久戰とが同時に存在するものと信ずる』

之は、『戰爭の重點が經濟戰線及び政略戰線に置かれた時は戰爭は持久戰となり、武力

戰線に置かれた時は戰爭は決戰となる』と云ふ反對者の見解に答へたもので、彼は武力戰線に就て右の如く主張したのである。

彼に據れば、進化の陰に沒し去つた舊來の一般的智識は之を放棄しなければならない。さうして時代の進化は決戰から持久戰へ移轉しつゝある。

抑々決戰には或る條件が必要である。即ちそれは、(一)、戰爭準備が自己の戰鬪能力を迅速に且つ最大限度に發揮し得る程度迄完備せること、(二)、廣大なる陸地國境が縱橫の良交通路を有すること、(三)、國力の優越せること、(四)、敵國の政治狀態が危殆に瀕せること、等がそれで、此の場合に於ては、物質及び人命の犧牲を最少ならしめる好條件の下に在るといふ事が出來るし、決戰を採用して戰爭を短期間に終結せしめることが出來るのである。

ところが、規模の無限大化しつゝある近代戰に於ては、戰費豫算を如何程增大しても、一國の生產力には限りがあり、且戰略的緊張を最大限に發揮するのは、經濟動員の完了後約半年を經過した時期即ち開戰第二年以後に在るのを普通とするが故に、かくの如き狀態

に於ては、將來戰は必ず長期に亘る戰爭となることを想察するに難くない。

然も、決戰を企圖する戰爭準備は軍事豫算を極度に厖大ならしめ國家の一般生產力の發達を阻害し又は斷絕せしめることがあるが、反之、持久戰を企圖する戰爭準備は主として國家經濟の均等なる發達に着意するものである。蓋し不健全なる經濟狀態は持久戰の苦難に堪へ得ないからである。

さうして、力の同等のものは決戰を廻避するのが普通であり、力の優つたものが決戰を挑めば力の劣つたものは守勢を執つて持久する、而して守勢は謂ふ迄もなく有利である。かやうな場合には、『如何にナポレオンに心醉し常に決戰作戰を用意してゐても戰鬪は結局持久戰とならざるを得ない。世界大戰に於ても、各國の參謀本部は單に理論的決戰のみを企圖したが爲めに悲慘なる失敗に陷つた。』

即ち、決戰は、之を一の戰略的理想とすべきものではなく、反對に、情況に依つて之を徹底的に採用すべきものである。

スヴェーチンは、詮り緒戰から決戰を求めて行くことは現實に不可能である、といふの

である。さうして彼はその理論の證明を戰史に求めると同時に、レーニンの言動にも求めたのである。

スヴエーチンに據れば、レーニンは政略に於ても戰略に於ても、持久戰論者であつて、最終目的を達する爲めには、其間に、媾和、協調、迂廻、後退、一時は不利な情況となつても、戰鬪乃至決戰を廻避する等各種の手段を竭さなければならないし、又、出發の當初から、長期、頑强、且つ必死の戰爭を鬪はなければならないとしてゐる。

一九二〇年に於ける國內戰當時、『レーニンは政略上堅く持久戰方針を保持したに拘らず、吾人（スヴエーチン）は戰略上彼の意思に反する方針を採り極端に左翼的空論を繼續した爲め、レーニンは、外交、職業聯盟、共產黨及び經濟政策の各戰線に於て此の急進的決戰方針の打破に努めた』のである。

此の理論から第二の戰爭の過程に對する觀察が生ずる。

即ちスヴエーチンは情況不利ならば、暫らく戰線を後退して敵の鋭鋒を避け、敵が疲弊消耗するを待つて一大逆襲に轉じ壓倒的決戰を敢行すべし、と主張するのである。

これは、雪のクレムリンにナポレオンを大敗せしめたやうに、露國の傳統的戰法でもあつたが、艱難な時代を多く經驗したレーニンの主張とも合致して居るのである。

一九一八年のブレストリトヴスク條約締結の直前に於けるレーニンは、その代表的な姿であつた。同年二月、獨逸のホフマン將軍が、革命に依つて內部的に崩壞した露軍を嵐の如く吹き散らし、エストランド、リフランドを席捲し、次でフインランドとウクライナとの明渡しを要求した。

その時、急進的決戰論者が敵はぬ迄もとばかり決戰を主張したのに對して、レーニンは『一歩退却は二歩前進を約束する』と主張し、『眞劍に國土を防衛する爲めには、充分な準備と、力の關係の嚴密な測定が必要である。若し準備及防衛力の不足を感じたなら、國土の奥深く退却する事が防衛の手段である』と論じ、その三月三日、戰勝者獨逸との間に獨逸の希望する條件で、單獨媾和を約束するブレストリトウスク條約が調印されたのである。

事實此の時は赤衛軍は、獨逸軍、チエック軍並に白色軍の包圍を受けて、文字通り四面

楚歌であつたから、レーニンの主張は正しかつたのである。

かくしてレーニンに傾倒したのか、或は政策的にか或は又心理的にか彼に迎合したスヴエーチンは、消耗戰理論のリーダーとなつたのであらう。然し彼の時代は革命直後から精々一九二七、八年頃までゞあつて、二六、七年頃には早くもその反對論者から峻烈な批判を浴びてゐたのである。何故ならば、彼の時代ソ聯の戰爭準備は極めて幼稚で、物質的にも精神的にも到底、歐洲資本主義諸國とは比較にならない劣弱なものであつた。從つて、その軍備を基礎としてレーニンに立籠つてゐたスヴエーチンとしては、退避熟柿主義に據らざるを得なかつたのであらう。

勿論彼と雖、それ故にこそ大いに軍備の充實は唱道したのであるが、出來上らない軍備で殲滅戰を企圖するなどは思ひも寄らなかつたであらう。

六、殲滅戰理論の勝利

悠揚迫らざる熟柿主義の消耗戰は成程如何にも大國露國の風がある。

然し、相手が例へば日本一國なら、ウラルの線まで後退し、日本の疲弊を待つといふのも或は一方法であるかも知れないが、資本主義國に圍繞せられてゐる共産主義の唯一國としてのソヴエットでは、そんな呑氣な仕構へは許されない。

そこでまだ澁ければ樽柿にして了へといふ進取積極の殲滅戰理論が擡頭したのである。

その先頭に立つたのは、一九二八年參謀次長の現職のまゝ飛行機と共に命を殞したトリアンダフイーロフであつた。彼は云ふ。

『現今の軍隊は著るしく複雜となり屢次の戰鬪範圍が比較的制限されて居り、又積極的にして殲滅的な攻擊の實施は極度の緊張と莫大なる消費とを伴ふが、それにも拘らず、かゝる長距離に亘る殲滅的攻擊は戰爭目的達成上尙決定的戰略たるを失はない。』

『然るに、軍事技術の發達と關聯して起つて來る長距離攻擊戰鬪はその實施が頗る困難であるからと云つて、一種の戰鬪上の日和見主義に隨し、積極的戰鬪を否定し、靜止の戰術と短距離攻擊を主張するのは(消耗戰理論)、救ひ難き誤謬に陷つたものと云ふべきだ。』

『戰術發達の正當なる道は、迅速に確實に、且つ能ふ限り大規模な敗北を敵に蒙らせる爲

めに、總ての可能性を完全に利用する方向に進むことである。』

『換言すれば決定的攻撃を與ふ限り遠距離に發展せしむる可能性を完全に利用することである。』

だから戰爭條件が如何に複雜となり、戰爭消費が如何に巨大になるとしても、それは科學人文の進歩の必然の結果なのであるから、之を廻避することは出來ない。とすれば、之に應じて、實戰者が確實に且つ容易に戰爭目的を達成することが出來るやうに、その條件を改善し、消費に堪へる樣にすればよい。即ち、一方に於て遲れた軍事技術を進歩せしめ武裝兵力編成の缺點を除き、敵制壓手段を改善し、輸送機關を必要水準に迄高め、他方に於ては、困苦に堪へ或は複雜高等となつた技術の修得が出來るやうに、軍の精神的生理的狀態を作り上げ、同時に、是等の諸條件の下に殲滅戰に勝利を得る如く戰術を練成すればよいといふのである。

詮り、スヴェーチン等の消耗戰理論は、當時に於けるソ聯の軍備（兵員の質量、並に編成裝備、資源の開發利用設備、國民の經濟、國家の財政等）が到底一大殲滅戰を長期に亘

つて斷行するに足らなかつた現狀を、不變の眞實として認識したものであるが、それこそ重大な誤謬で、是等の現狀を極度に改善引上げればいゝではないかと、いふのである。

さうして彼等は、實際にさうしなければ、プロレタリアートの祖國、唯一の共産主義國であるソ聯の存在は不可能であると考へたのである。

何故ならばレーニンも云つてゐるやうに、次の戰爭こそは第二の世界大戰であり、而して之をソ聯から見る限りに於て、共産主義が資本主義を決定的にやつつけるか、共産主義の祖國が叩き潰されるかの、最初にして最後の一大決戰である、と彼等は見た。

從つて生溫い退却戰略などで戰爭を期待して居たのでは、平時の宣傳戰乃至は政略戰に依る世界赤化も徹底的には出來ないし、若し武力戰となつて劣勢であるならば、今度こそ一九一八年の樣な譯には行かないで元も子も失はなければならない。どうしても勝利を得なければならない。

勝利を得る爲めには、他方に於て戰はれる經濟戰、政略戰及び思想戰に於て、第二の獨逸を敵側に作る（歐洲大戰で獨逸が敗れたのは佛軍の大戰略家フォッシュ元帥の頭腦であ

つたかも知れないし又獨軍に石油の缺乏したことも重大な原因であつた、然しその決定的な敗因は國内に革命が起り兵士が叛亂を起したと云ふ政治的な、社會的な、さうして精神的な内部崩壞に在つた）ことも必要であり、その可能性が極めて濃厚である――と彼等は云ふのだ――かも知れない。

けれども武力戰を擔當する戰略家としては、武力戰線に於ける勝利を把握することが絶對の目的である。さうしてかゝる勝利とは、敵の戰爭能力乃至は戰爭意志を破碎することで、その爲めの直接目的は敵を殲滅するに在る。何故ならば局部的戰鬪に於ける勝利の如きはそれだけでは殆んど意味を爲さい。獨逸は歐洲大戰で聯合軍を巴里を指呼する所まで追ひ詰めたが結局敗れた。だから、局部的勝利を終極の目的に對して意義あらしめる爲めにはかゝる戰爭を積重ねて殲滅的勝利に導かなければならない。

だから殲滅戰理論は赤軍建軍の基本的な不可避の要求であると云ふ事が出來る。

そこで之を實際の場合に就て考へて見ると、殲滅戰に依つて次の如き効果を期待することが出來る。

第一に、現今の戰鬪に於ては、一方面軍の戰線はその縱長が二百五十粁に及ぶものである。それ故に、『ヴエルサイユ條約に依つて諸小國を創り、バルカン化された歐洲の、是等小國は二百五十粁と云へばその領土の全面積を掩ひ、より大國と云へども、略半ばに達する。』

即ち此の戰線に於ける殲滅的勝利は小國武力の殆ど全部を、より大國武力の約半ばを擊破することになる。これは、それだけでその兵力を著しく劣弱ならしめ、更に他の條件と結合する場合には、眞實の戰略的勝利の前提を作るものである。

第二に、かゝる殲滅的勝利は、大國に對しては、その兵力を大部隊づつ殲滅する結果、その人員及び器材を迅速に殲滅せしめ、從つてその國家の戰鬪能力を相當迅速に失はしめると共に、敵國に於ける社會的、政治的動搖の客觀的條件を作ることになる。かくして長距離に亘る殲滅的なる攻擊は今日と雖も、尙ほ戰爭を國内戰爭（内輪喧嘩）に誘導する最も確實な手段の一であり、殲滅戰理論を支持する積極的根據である。

さうしてレーニンやスターリンが之に贊成して追ひ付け追ひ越せと云つた以上、消耗戰

理論は凋落せざるを得ない。然かも、現代赤軍の著名な有力者、陸大兵學教官イッセルソン、陸軍次官トハチエフスキー、陸大校長コルク、參謀次長ヤディアキン、赤軍人事部長フエリドマン、オソアビアヒム中央會議長エイデマン、航空本部長アルクスニス、等は殲滅戰の主張者であり、赤軍の大御所ヴオロシロフ、騎兵官ブデイヨンヌイ、極東赤衛軍司令官ブリユツヘル等の元帥連も之が支持者である。

ところが殲滅戰は、それだけに非常な難關がある。そしてそれは將來戰の持久性、繼續性に密接なる關連がある。

七、少數軍か大衆軍か

時間の點から見た將來戰の觀察に相反する二つがある。

一は即決觀で他は持久觀である。

前者の代表的人物は先年物故したイタリーの大飛行集團軍理論の創始者ドウエである。

彼は、開戰と同時に一大飛行集團を敵國の中心地又は根據地に飛ばし、破壞爆彈と共に毒

ガス爆彈の一大量を投下して之を一擧に殲滅する。然る後陸軍は自動車に搭じて迅速に侵入し最重要地域を占領する。然して彼の理論通りにやれば戰爭は二十四時間内に終結すると考へた。

成程之は一つの着眼であり、ソ聯ではラプチンスキーが直ちに此の理論を取入れ、アメリカのミッチエル將軍も、『吾に二千臺の飛行機を與へよ、然らば瞬時にして日本を封鎖せん』と云つたし、その理論は一部的には各國の軍編成に實際取入れられて居るのである。

然し、之は稍獨斷に過ぎる理論で、敵の對抗手段を考慮に入れてない傾がある。

そこで、今日の常識、即ち豫見し得る兵器、戰術の範圍内では、持久戰觀の方が妥當であるやうだ。

蓋し、將來戰は屢々云つた樣に、今日に於ける列國の軍備から云つても、戰術から云つても頗る大規模なものである。第一に第一線防衛軍はその防禦たると攻擊たるとを問はず凡そ戰略行動の可能なる國境の全距離に、横に長く戰線を作る。さうしてその戰線は結局

數百キロに及ぶ縱長を持つことになる。それに當然堅固な防禦陣地が構築される。然かも兩軍同樣の配備、力量を有つことになる。そこで、戰鬪は容易に決するものではない。

第二に、かゝる大戰線を維持する爲めには莫大な人員と器材、及び工業とが必要となつて來る。そこで之を急速に動員したとしても、双方がいたちごつこを繰返へして居る間に半年や一年は經過する、といふ譯だからである。

だから、戰爭は長期に亘つて繼續すると見るのは當然であらう。從つて、かゝる戰爭に於て殲滅戰を敢行しやうとするのは非常な困難であり、絶大な努力が入る。それにも拘らず斷行するとすれば之に打ち克つ用意が必要である。

ソ聯の兵學界に於ける他の二大問題である『少數軍か大衆軍か』、『深き戰術』は之に依つて生じた問題である。

歐洲大戰後の數年間は、將來戰に對する豫想、之に對する準備の困難、國家總動員に對する實施上の非常な困難を考へて、歐洲の兵學界でも一時は、全く當惑したやうであつた。

人口は減る、經濟的に疲弊する、軍事技術は複雜となる、軍事教育に多く費せば、經濟恢復は遲れる、兵器彈藥は一層の巨額を要する、羸瘦衰退した經濟組織を如何にして之に適應させるか。實際困惑した事であらうと思はれる。

此の時、現はれたのが所謂少數軍理論であつた。

現代の戰爭が必要とする數百萬の大衆軍は、一切の社會的條件、就中、軍の動員と教育との關係から勢ひ惡質となる。然るに、現代戰が要求する所のものは、精鋭にして機動性に富む機械化軍でなければならない。そこで、少數の軍事專門家を以て組織する、高機動且つ重裝甲の機械化軍に着眼が及んだ譯である。

だからその代表的な主張を見ると、タンク專門家はタンクを、飛行機の專門家は飛行機を主材としてゐる。

イギリスのタンク專門家フラー少將は次の如き編成と作戰を主張する。

即ち先づ陸軍を二つの基本部隊、少數打擊軍と大衆占領軍とに分ける。打擊軍は更に戰車部隊と輕步兵部隊とに分けられる。又占領軍は更に裝甲機械化部隊と通常部隊とに區分

され、通常部隊は別に自動車化部隊を有する。さうして打擊軍は、長期精密な訓練を經た比較的少數の精兵を以て組織され、占領軍は普通訓練の大衆から成立する。精兵戰車隊は果敢に敵陣突擊を試み、戰車が地形に依つてその行動を制限された場合、精兵輕步兵部隊が活躍する。

前記イタリーのドウーエの主張は空軍を第一主材、機械化部隊を第二主材としたものである。

之を要するに彼等の思想は、歐洲大戰に於て發現し、且つその威力を發揮した新兵器、即ち飛行機、タンク、各種要求の機械化、毒ガス等の利用を極度に高度化したもので、當然の一着眼であつた。

之に對してソ聯の兵學界でも、ウエルホフスキーはフラーの說に共鳴し、大衆軍の消滅を主張し、階級の基礎の上に立つ少數の騎士より成る軍隊が之に代ること明かであると云つてゐる。前記のスヴエーチンも、『戰爭には精銳にして且つ相當多數の軍隊を必要とする』と云つた。又ラプチンスキーは、ドウーエの飛行集團理論を取り入れて、戰略的飛行

集團理論、即ち獨立の戰略的任務を遂行し得る大飛行艦隊とも云ふべきものゝ創設を力說した。彼の說はアルクスニス其他の兵學者にも贊同され、此の理論は獨特の編成形態を取つて、ソ聯軍に生きてゐる。

歐米に於ても同樣に、例へば獨逸のフオン・ゼークト將軍はフラーの打擊軍に騎兵部隊を加へた作戰軍と、大衆軍たる防護軍との理論を展開し、フランス、イタリー等に於ても又米國に於ても多くの贊同者を得た。さうして現實に、軍の編成內に於ける裝甲機械化熟練部隊の地位が向上且つ擴大されつゝある。

然し乍ら、ソ聯兵學界の大體の傾向は、所謂少數軍理論の否定に傾いてゐる。

トリアンダフイーロフに據れば——

第一に戰略的見地から見て、此の思想は餘りに幼稚である。假令高度に裝甲機械化されてゐるとしても、敵地深く侵入するとすれば、直ちにより强力なる部隊に支援されなければ、孤立離斷される危險を冒さなければならない。フオン・ゼークトの云ふ樣に假りに獨特の新騎兵隊が居たとしても、現今の國家を降伏せしめることは不可能である。縱し惡質

であつても、數百萬の軍隊を有する國家は其の領内に侵入した少數機械化軍を撃退するのみならず之を粉碎する可能性を有つてゐる。蓋しそれは、かゝる機械化軍に對抗する凡ゆる手段を有し、然かもその戰線構成が廣長大であると共にその縱長又大であつて、少數機械化部隊では終極的任務の達成は不可能である。即ち、『敵國内五百五十粁乃至七百五十粁に亘つて侵入することを要するが如き國家（ソヴェートの如き）の中心地に對する戰鬪行爲は、數百萬の軍隊を以てして始めて遂行することを得るものである』

第二に社會的見地から見て、少數軍論者の主張は、現在に於ける資本主義が階級鬪爭の激化に伴ひ、自國の大衆を武裝することに多大の危險を感ずる結果、少數專門の精鋭軍を作成し、以て大衆武裝の危險を緩和せんとするものに外ならない。

然るに將來の戰爭は、資本主義國家に於ても、國家の能ふ限り最大の軍事的緊張を喚起するものと考へなければならない。さうして政治的、社會的團結に不安を感ずる資本主義國は、國内全大衆に信頼を置くことが出來ないが、ソ聯に於ては、社會主義祖國の防衛が全勤勞階級の義務であることを信じ、祖國防衛に戰鬪能力ある全住民を起たしめ、之に優

良裝備を與へることが可能である。

それ故に社會的情勢が許すならば、大衆軍をそのまゝ精鋭化することが最も望ましいことになるのである。

されば、少數軍理論は起つたが、現時に於ける諸國家の實際の動向は、大衆軍の建設に營々としてゐるのである。

（一）、能ふ限り多數の兵力豫備を得やうが爲めに、各國競つて兵役年限を短縮した。

（二）、軍需工業は量質共に大擴張された。

（三）、武器彈藥の大量生産を持續してゐる。

（四）、國民大衆を抑へる手段と自信とを持つてゐる。（國家機關、學校、都會、新聞、ファシスト黨等）

（五）、フラー等の理論を現實には、全大衆軍の高度機械化に向けてゐる。

即ち、理論から云つても、現實の各國兵備の趨勢から言つても、少數軍主義はなり立たない。どうしても大衆軍を能ふ限り精鋭なるものとしなければならないといふのである。

然し乍ら今日に於ては、一〇〇パーセント英雄的兵士を以て大衆軍を組織することは不可能である。何故ならば、精兵を作る爲めに年々の壯丁に長期教育を施せば、一國産業を犠牲にしなければならない、といふ様に、質と量とは互に矛盾する。そこで今日では、一定の基準に絶對必要な條件に對して中位の兵士を以て、即ち中位の能力と中位の質とを有する兵士を以て滿足しなければならない。

かくして一方、兵卒材料及び各種資材の増大強化が行はれ、他方熱心に新戰術が考究されてゐるのである。

一九二七年に約七〇師團であつた歩兵は一九三五年末約八十五師團に、同じく騎兵は約十師團から約二十師團に、飛行機は約千二百機から四千餘機に、戰車は約百八十臺から約四千臺に激増した。兵員數は約百二十萬から約百六十萬に上つたのである。

さうして教育は、十九歳から四十歳までの國民皆兵主義で、正規軍及び民兵部隊基幹部員は現役五年、在營二年、歸休三年、第一豫備役九年第二豫備役六年となつて居り、民兵部隊の交代部員は、召集前二ヶ月の教育を受け、現役五年間に歩砲兵八ヶ月、騎兵十一ヶ

月間の召集がある。その外、隊外現役勤務があつて、正規部隊にも民兵部隊にも入らないもの全部が、現役五年間に六ヶ月以内の召集を受けることゝなつてゐる。その外在郷兵の素質向上の爲め各種の軍事教育が、工場勞働者及び農民に對して、様々な方法で行はれてゐる。

詮り大衆軍の量と共に質の向上を圖る萬全の手段が講ぜられてゐるのである。

八、赤軍が誇る『深き戰術』

革命に依つて作り上げられた赤軍に、最も缺けてゐたものは『軍の頭腦』であつた。

一介の農民に過ぎなかつたヴオロシロフが、烏合のパルチザンを組立てゝ赤軍を作り、それを根幹として雪達摩の様に大きくしたのが今日の赤軍である。だから赤軍功勞者の多くは、現在の最高統率者ヴオロシロフや、彼と共に大騎兵集團を作つて赤軍勝利の決定的動因を作つた騎兵監ブデイヨンヌイ等のやうに兵士か下士か、或は勞働者か農民かゞ却々多い。

勿論、いよ〳〵赤衛軍が出來てから、之に來投し、その『頭腦部』(參謀部)を受持つた舊帝政參謀將校も決して尠くはなかつたが、何分にも、勞、農、兵出身者が、革命の指導者たるの意氣と共に壓倒的に優勢であつた。

そこで、レーニンの天下が稍安定して、靜かに赤軍を顧望した時に、その幹部は頭腦部に不安を感じたのである。さうして舊帝政參謀將校を掻き集めて、赤軍の頭腦部建設に着手した。日露戰爭で上等兵、歐洲大戰で軍曹だつたブデイヨンヌイも、身大將であり乍ら改めて赤軍大學へ入學したりした。

かくして赤軍幹部は、戰爭の社會的條件、就中その經濟的基礎の擴大强化及び政治的團結に專ら意を注ぐと共に、『赤軍戰略』に基く『赤軍戰術』の深化に孜々として勵めた。その特徴は、天才的、抽象的作戰でなく、飽く迄も現實の物的基礎、科學的、數字的基礎に根據を置いた作戰の完成に在つた。

その最も大きな成果の一つが『深き戰術』である。

『新しい技術に基いて生じた新しい戰鬪方式、なかんづく深き戰術は、ブルジョア軍より

も赤軍によつて、より急速に、より完全に攻究され、體得される』

とニコノフは自讃してゐる。

深き戰術も、必ずしも赤軍の創意創案に成るものではなく、西歐兵學界に於ても、アメリカ兵學界に於ても、既にその研究が、ソ聯より早く行はれてゐたやうである。アメリカに於て空中デサントの試驗が逸早く行はれた如きは、之を親ふに足る一つの資料である。

ところで、深き戰術とは、要するに、敵をその配備の全縱深に亘つて一擧に擊破する戰術を云ふのである。

從つて、それは、第一に、殲滅戰理論を前提とし、即戰即決を方針とした近代戰術である。さうして第二に、近代戰の特性として、大衆軍が、可能なる最大の正面に當然展開配備し、然かもその配備の縱長が、軍の機械化に依つて著るしく深大となつた結果である。換言すれば橫の展開に對する縱の展開を主張する戰術である。

トリアンダフイーロフに據ると、現今の戰爭は長期に亘つて繼續する傾向がある。彼によればその理由は、

第一、戰線の縱深が大となつたこと
第二、戰線の抵抗力が强化され、力と神經の消耗速度が大となつたこと
第三、從來の基本戰術たる中央突破乃至は包圍迂廻が特に困難となつたこと
第四、動員の最大高潮時が半年乃至一年以内の時期に在ること
等が主なるものである。

戰線の縱深は、防禦配備に在つては、師團で四——六粁、軍團で八——十粁、軍の如き編合部隊に在つては二十——三十五粁に達する。故に多くの場合鐵道に依つて戰場に到着する戰略豫備隊、軍飛行隊の距離を加へる時は六〇——一〇〇粁に達し、方面軍になると二〇〇——二五〇粁に及ぶ。

然かも、防禦戰線は、機關銃、步兵砲、各種砲兵の發達、その射擊速度の增加、着彈距離の增大、毒ガス或は飛行機等新戰鬪手段の出現に依つて、その防禦力即ち抵抗力が著るしく增大し、且つ軍隊の力と神經の消耗が、彈藥其他の消耗資材の消耗と共に莫大となつた。さうしてかゝる困難を突破すべき軍の裝甲化、機械化に對しては、又之を打破すべき

手段が考案されつゝある。

而も、戰線は初めから殆んど可能最大の橫幅を展開し、所要の大兵力を配備してゐるから、全戰線個々の戰鬪で壓倒的の勝利を收めない限り、包圍迂廻乃至は中央突破は容易でない。さうして、個々の戰鬪は、軍の機械化に依つて不利なる地點への增援が速くなつたから、僅かな勝利では突破は意味を爲さないことになる。

そこで、國內の總動員を能ふ限り急速にしても、スヴエーチン、トリアンダフイーロフ等の研究では早くて半年以後でなければ、その最大能率に達しない。とすれば戰線は固着する。戰鬪は繰返へされる。消費は彌が上にも嵩む。といふ譯で、戰爭は長引くことになる。

果して然りとすれば、國力は疲憊する許りで、所期の目的を達するどころではなく、孤立無援の赤色ソ聯としては、頗る危險な狀態になる。殲滅戰で、即戰即決でなければならない理由は玆に在る譯である。

然らばその爲めには如何にすべきか？

『現今の戰鬪に於て勝利を得るといふことは、敵の戰術配備の全部を占領し、且つ戰鬪中行軍自働車及び鐵道に依つて戰場に到着した部隊を擊退することを意味する』從つて、『總てを綜合して考へるのに、戰鬪は縱長二十五粁乃至三十粁の範圍に亘つて行はれるであらう』（トリアンダフイーロフ）

それ故彼は、決定的の成果即ち敵の殲滅を達成する爲めには、敵をして他の戰線から增援を爲さしむる遑を與へず、攻擊軍をして他の戰線に對して行動を自由ならしめるやうに屢次の戰鬪に於て徹底的に勝利を得る樣な作戰計畫を樹てなければならない、とした。

是れが深き戰術への最初の發想であつた。然るに、彼の時代に在つては、赤軍の一般戰爭準備が彼の作戰計畫を具體化するに足る程發展して居なかつた。だから彼は、『惜むらくは現今の陸軍は引き續き數次の攻擊を加へる可能性を限定されてゐる』と嘆じた。

而してその後に於ける兵學者は、二次に亘る五年計畫の實績と共に、彼の戰略思想を展開完成したのである。

ワクーリチはそれを次の如く說明した。

現代戰に於ては幾多の連續的作戰が必要である。敵を各個に擊破しつゝ、最後の大會戰に於てその主力を殲滅しなければならぬ。然るに防者は努めて一連不斷の戰線を形成せんとし、又その可能性もある。それ故、敵をその翼側から包圍することに依つて完全に殲滅する可能性を得る爲めには、何よりも先づ防禦陣地の突破が必要である。而して之が遂行は爾後敵を殲滅するに最も有利な作戰形式、即ち翼側の包圍或は背後よりの攻擊を用ふることを可能ならしめる。

所が、彼はトリアンダフイーロフが、正面から各個に屢次に擊破して行くことを想定したのに對して、それでは依然として困難を脫却することが出來ない、後方からの增援及び後方からする攻擊軍に對する直接の反擊を同時に消滅せしめる爲めに、『敵陣地の全縱長に亘つて、苟くも作戰に參與する一切の部隊及び諸設備を一擧に擊滅することが必要である』とした。

ところで敵防禦陣地の縱長は一方面軍に於て略次の如くである。

（イ）編合部隊（軍）——二五粁以內

（ロ）編合部隊所屬飛行隊及び戰鬪用輜重二〇——三〇粁
（ハ）軍飛行隊、軍司令部、軍豫備隊、下車停車場四〇——六〇粁
（ニ）軍飛行隊、及び方面軍飛行隊、軍豫備隊、補給及び下車停車場六〇——一〇〇粁
（ホ）方面軍倉庫、方面軍司令部、配給停車場、方面軍豫備隊一〇〇——二〇〇粁

そこで、是等二百粁に亘る敵部隊を同時に制壓撃滅する爲めには次の如き攻撃を同時に敢行する。

（イ）に對しては、戰車、砲兵、化學部隊、飛行機（輕爆機又に攻撃機）及び補助部隊を有する攻撃部隊

（ロ）、（ハ）及び突破地區に向つて大縱隊を爲して行軍する軍豫備、軍司令部に對しては輕爆機、空中上陸部隊と協同する機械化部隊及び騎兵部隊

（ニ）及び下車中の豫備隊、軍用列車に對しては、輕爆機（又は一部重爆機）、突破孔より侵入せる機械化部隊及び騎兵部隊

（ホ）及び鐵道要點に對しては、重輕爆撃機及び機械化部隊

即ち之に要する攻撃軍の完全なる編成は次の如くなる。

狙撃（歩兵）師團　十五——十六
機械化兵團及騎兵集團　各一
戰車大隊　十二——十五
補充砲兵聯隊　九——十二
輕飛行旅團　四——六
驅逐飛行機　一部隊

及び、重爆を主とし輕爆を加へたる飛行集團、騎兵機械化騎兵團の混合部隊、等が加はる。

（尙右の外に長途遠征を試み敵本國重要地點を襲撃するといふ樣な獨立の戰略行動を執ることの出來る戰略的大飛行集團がある。）

以上が深き戰術の構成の概觀である。

九、極東軍備の意義

そこでソ聯の極東軍備を見る。

歩兵師團十二、騎兵師團三、其他コルフオーズ師團、ゲ・ペ・ウ等合せて兵員二十數萬。飛行機は九百機、内一割は重爆機、戰車約八百。さうして國境の戰略要點、即ち軍事行動の可能なる地點又はソ聯の軍事要點には、堅固なトチカ陣地が設けてある。

深き戰術に依る殲滅戰は、歩兵を基幹とする攻擊部隊の第一戰鬪に依つて開始される。その場合、その第一戰が不利であつては問題とならない。即ち、その第一戰所謂緒戰に於て壓倒的勝利を獲得し、その餘威を驅つて戰果を殲滅戰にまで擴大展開することが絶對に必要である。換言すれば先づ緒戰に於て壓倒的勝利を得ることが一切の前提である譯だ。

極東軍備の尨大なる構成は、實にかゝる目的の爲めに萬全の準備を整へてあるに外ならないのである。

然かも、將來の戰爭は、曾て獨逸の二名將フオン・ゼークト將軍並にルーデンドルフ將

軍が喝破した樣に何等宣戰の布告なしに始まるであらう。

ルーデンドルフは其著『來るべき戰爭』に於て次の樣に言つた。

『開戰だ！

だが宣戰の布告など何にもない。ライフル銃がひとりでに發射する。

ノールウエー、オランダ、スペイン、ポルトガル、それからトルコと極東の日本と、是等を除いた歐洲の全國家は、その日を第一日として動員を下令する。

戰爭は空で、海で、その晩から始まる。

ロンドン、パリ、マルセイユ、ミラン、ローマ、ヴエニス、ブタペスト、それからデュツセルドルフ、ルール、ベルリン、ウインナ、ライプツイツヒ等々の凡ゆる都市と工業中心地は、毒瓦斯彈、爆擊彈、及び細菌彈を以て見事に爆擊される』

赤軍は、將來戰を同樣に覺悟してゐる。

ニコノフは次の樣に言つてゐる。

『赤軍はその戰鬪訓練に於て二つの根本目的を持つ。即ち（一）戰鬪技術及び複雜なる戰

闘方式の體得といふ方面で高度の訓練程度を確保すること、（二）周圍の資本主義諸國の攻撃を撃退すべき平素の準備を確保すること、これである。

『赤軍の統帥者たる同志ヴオロシロフによれば赤軍は「絶えず成長せねばならぬ。だが何時でも完全であらねばならぬ」この要求が正當であることは現在に於て殊に明瞭である。蓋し今や對ソ聯攻撃準備における帝國主義諸國の根本的方法が全く明瞭に決定したからである』

その方法とは、非常呼集、動員、軍事註文等を演習又は試驗的の名に籍りて、軍隊及び經濟をこつそり動員して何時の間にか戰爭へ入り込むと云ふ方法である、と彼は言つてゐる。

かゝる不可測の、不意の開戰の爲めに遺漏なき用意を爲すことが彼等の用意であり心懸けである。

而してそれは、一言以て蔽へば、平時に於ける全戰備、兵員、裝備、編成、資材、背後の補給施設、運輸、工業等々凡ゆるものを、出來る丈戰時の狀態に近づけて置く。といふ

事である。

平和は素より希ふ所である。

戰爭が好きで堪らない、なんと云ふ者はさう無暗に在るものではない。だが、それ故にこそ、客觀的條件が戰爭を暗示するやうな場合には、之を未然に防遏する凡ゆる手段を竭さなければならない。さうして、ソ聯の極東軍備が或る大きさに達することが、不幸なる事態を招徠する一の禍因であるとすれば、更に若しその軍備を撤退させる事が出來ないとしたら、相對的に之を零とするより外に途はない。

そんなら一體赤軍は強いだらうか？

そんな事は誰にだつて分るものではない。戰つて見なければ判ることではない。

が、決して侮つてはならない、といふ事だけは慥かだ。語を換へて言へば、油斷するなといふことだ。

油斷と云ふ事は、啻に心理的な問題ではなく、物質的な戰爭準備に重大な關聯を有つも

のであると思ふ。

そこで赤軍の戰略家も言つてゐる。

不十分に裝備された部隊はその素質が如何に優秀でも、十分に裝備された部隊の爲めに慘害を蒙らされる。凡ゆる點に於て機械化された近代軍は機械の力に負ふ所が大であるから、かくの如き優秀部隊は往々にして救ふ可らざる打擊を受ける。

多數の人員を要する將來戰に於て、甚大なる兵員被害を蒙ることは、それ自身大きな痛手であるが、若しそれが戰爭の全局に及ぶとすれば、容易ならぬ事である。唯それが、裝備が不十分であつたといふ事、例へば機械化が不完全であつたといふことだけのために。盜匪の被害が頻々としてある所では、眞夏の寢苦い夜でも戶締りを嚴重にしなければならない。

（附記、ニコノフ及びワクリチの言葉は、ポチヤロフ著橋本弘毅氏譯『科學的軍備と現代戰爭』より引用。）

赤軍の巨頭を語る

一、行詰つた赤軍人事

ソヴエト聯邦で、國防人民委員と云へば、陸海空三軍の最高統帥者で、參謀總長も教育總監も悉く彼の命令の下に在る。

その國防人民委員ヴオロシロフをつかまへて、たゞの一兵卒でも、『同志ヴオロシロフ』と云つて呼びかける。平等意識と云ふか無階級意識と云ふか、或は鐵火流血の革命を潛つて來た同志愛意識といふか、兎も角も、さうした最初の出發點の理論が依然として表面的に維持されて來たが、事實は決して平等でも同志愛でも何でもなく、ヴオロシロフが一兵卒に呼びかける『同志』と、一兵卒がヴオロシロフに呼びかける『同志』との間には天地

雲泥の差が響いてゐたのである。

聲望や人氣の外に、明かに序列と階級とが意識され、現存されてゐたのである。

それを立證するものが、昨年九月二十二日附で裁可制定された『武官進級令』である。

モスコウ政府の表明した制定の理由は、

『將校は終身的職業となり、その結果、其の職務上の特質は法律で進級手續を正確に定めることを必要ならしめ、赤軍兵士の教育上の責任並に戰爭の際に於ける將校の指導的役割を、又各將校の軍事的專門的技能、勤務上の經驗及び功績並に赤軍將校としての權力及權威を、明確に表示するところの軍事上の名稱を制定することを必要ならしめた』

といふ點に在る。

これは人と人との間の儼然たる階級の別を明確に認め、命令と服從との上下關係を再確認したものである。何故ならば、かゝる勤務上の能力的差別、或は功罪關係、乃至權力關係を除いては、人間の階級的差別觀を考へることが出來ないからである。

といふ譯で、將校の階級を陸軍に就て見ると、下から順に、

少尉、中尉、大尉、少佐、大佐、旅團長、師團長、軍團大將、二等軍大將、一等軍大將

元帥

の十一階級に定めた。（海軍には中佐がある）詰り、大將が三階級あつて、その上に元帥がある譯だ。

赤軍には、軍に政治指導を爲すものがある。之を政治部と云ひその長を軍事委員と云つてゐるが、之は軍隊に、革命意識——今では社會主義の祖國ソヴエット聯邦に忠誠を效させる爲めの政治教育、精神訓練を爲すと共に軍の政治部員と共に敵軍の背反行動を宣傳指導せしめる役目のあるものである。さうしてそれも、右の區分に從つて階級が出來た。

詳しい事は措いて、目星の所を擧げて見ると次のやうである。

△元帥

ヴオロシロフ　（國防人民委員）

トハチエフスキー　（國防人民委員第二代理）

ブデイヨンヌイ　（赤軍騎兵監）

エゴロフ（赤軍參謀總長）

ブリユツヘル（極東軍司令官）

△一等軍大將（陸空軍）

カメネフ（赤軍防空部長）

ヤキール（キエフ軍管區司令官）

ウボレヴイツチ（白露軍管區司令官）

ベーロフ（モスコウ軍管區司令官）

シヤポーシユニコフ（レニングラード軍管區司令官）

△一等軍軍事委員

ガマルニツク（國防人民委員第一代理——第一次官——兼赤軍政治部長）

△一等司令長官（海軍）

オルロフ（赤軍海軍長官）

ヴイクトル（太平洋艦隊司令長官）

△二等軍大將（陸空軍）

アルクスニス（赤軍航空本部長）

コルク（陸大校長）

ヤデイアキン（赤軍參謀次長）

ハレブスキー（赤軍機械化本部長）

ドウイペンコ（沿ウオルガ軍管區司令官）

レヴアンドフスキー（裏コーカサス軍管區司令官）

ドウヴオオイ（ハリコフ軍管區司令官）

カシリン（北コーカサス軍管區司令官）

△二等軍軍事委員（略）

△二等司令長官（海軍）

ガルレル（バルチツク艦隊司令長官）

コヂヤノフ（黑海艦隊司令官）

△軍團大將（著名のもの）

プートナ（駐英大使館附武官）

フェリドマン（赤軍人事部長）

エイデマン（オソアビアヒム中央軍議長）

赤軍關係ではヴォロシロフの前任者、トロツキーの後繼者即ち第二代の國防人民委員であつたフルンゼが死んだ位のもので、何れも革命時代からの大立物ばかりだ。そこで、騎兵監も十年勤めれば、師團長を十年やつてゐる男もある、といふ風で、騎兵監や參謀總長なら何年やつたつていゝであらうが、師團長を十年やつても軍管區司令官にもなれなければ、軍團大將にもなれない、といふのでは水が淀んで濁つて來るかも知れない。

或は新進のフェリドマンが勤めたモスコウ軍管區司令官の後任として先輩のベーロフが行けば、ベーロフは左遷ならまだよいが、階級を下げられた樣な氣もするであらう。然かも大體に於て皆赤軍創設當時若かつたので却々死なない。と云つて停年制がある譯ではな

いし、恩給もないから、無暗と馘首する譯に行かない。

かうした理由から、赤軍の人事は相當行詰つて居たのである。そこで何とか打開をする爲めに、階級制度を設け、現實の役目は兎に角として、何かの機會に階級を上げれば、それだけ餘裕をつくると云ふものである。

武官進級令に、かうした考慮もない譯ではなかつたらう。

然らば是等赤軍幹部の人物如何。

次に著名な人々の人物略歷を點描しやう。

二、元帥ヴォロシロフ

一九一七年十一月七日、ボリシエヴイキーのクーデターがケレンスキー政權を倒した（所謂十月革命）。世界の六分の一を占めるロシアの全領土は赤色革命の大吹雪に掩はれて至る所にソヴエート政權が樹立された。最下級の兵卒、勞働者、農民が續々起つてソヴエート政權に參加した。獨逸軍の爲めに散々の醜狀を暴露した軍隊は、眞つ先に崩壞して行

つた。

そこでレーニン等のソヴエート政權は、革命政府を護る赤衛軍の建設に着手した。

だが、革命なんて、そんなに簡單に行くものではない。あれ程腐敗し切つて居たロシアに於ても、『祖國ロシア』を護らうとする白系軍が之亦隨所に蜂起して赤衛軍と對峙した。

さうして一九一八年から一九一九年へかけて、是等の白衛軍は、聯合會や獨軍の支援を得て、四方から赤衛軍を包圍し、次第にその輪を小さくして行つた。

その一九一八年——

三月、レーニンの革命政府が獨逸と單獨媾和（ブレストリトウスク條約）を締結し、獨軍は潮の如くウクライナに進擊した。

その地方に赤軍を自稱して居た赤色パルチザン隊は、對戰の氣勢を示して居たが、その多くは戰はずして敗走して了つた。さうして殘りの一部がルガンスク市附近に集まつた。それが爲め獨逸軍は易々と占領地域を擴大して行つた。然かもカザツクは獨軍の支援を得て白色政權スコロパドスキー政權を樹立し、カザツクの人望を一身に蒐めて居たコルニロ

フ將軍をしてその軍を統帥せしめた。その爲めドンバス地方一帶は正に獨軍の蹂躙に委せられやうとした。

そこで、パルチザンの指揮官や領袖達がロダコウオ驛に集合して軍事會議を開いた。その時、ルガンスクの勞働者軍の指揮官ヴオロシロフが起つて、

武器の不足した烏合の衆であるパルチザンが、徒らに小股を掬ふ樣な從來のパルチザン戰法を繰返へして居たのでは、組織ある獨軍に對して到底抵抗することが出來ない。よろしく兵中を集結して一軍を組織し、至嚴なる軍紀の下に結束するの外獨軍に對抗し之を打破る手段はない。

と、烈々火を吐くが如き口調で大演說を試みた。

軍議一決。直ちに一軍が編成され、全員一致してヴオロシロフを指揮官に推した。かくてその翌朝に於ける獨軍の攻擊を豫期しつゝ、彼はその夜の中に軍司令部を組織し、獨軍の攻擊が始まるや、頑强に抵抗し、彼は自ら第一線の陣頭に立つて奮戰した。他のパルチザン隊に在つて彼を知らなかつた兵員達も、初めて彼を認め彼を信賴した。さうして全

員擧つて猛烈な抵抗を敢行した結果、思はぬ反撃に會して當ての違つた獨軍を玆に始めて敗走せしめ、彼等は獨軍の遺棄した火砲や捕虜を鹵獲した。

かうして彼の聲望は軍内一時に重きを爲したのであるが、然かも此の戰勝は赤軍に取つて極めて重大な意義を持つことゝなつた。

ヴオロシロフの軍は之に勢ひを得て所在に白系カザツクを打破りつゝツアリチン（今のスタリン・グラード）に至り、そこでスターリンと會した。

ところが陣歿したコルニロフに代つたクラスノフ將軍は、チエツク軍に合體する爲めカザツクを率ゐてツアリチンを猛烈に攻擊して來た。スターリンとヴオロシロフは協力して辛うじて此處を死守した。そしてソヴエートの史家は此の防禦戰を、『赤いヴエルダンの守り』と言つてゐる。

だが、獨逸の敗戰に依つて異狀を呈した白色戰線の虛を衝いて、ドン・カザツクの中心近くまで進出したのも束の間、スコロパドスキー政府に代つて佛國の支持を受けるペトリユラ政府が出來たり、クラスノフは、英佛軍の後援で盛り返へしたデニキン軍や、ウラル

から進擊して來たコルチヤツク軍らに脅やかされ、赤衛軍の戰線は次第に後退して、モスコウさへ窺はれる樣になつた。他方、英米聯合軍は白海のアルハンゲリスクに上陸して南下せんとし、英佛聯合軍はフインランドからカレリア地方に侵入した。ボリシエヴイキ政權はかなり危險な狀勢となつた。

此の頃、南部戰線の總指揮官はエゴロフで、その政治部の指導者（即ち總司令官、最高統帥者）がスターリンであつた。さうしてヴオロシロフはスターリンを扶けて南部軍中に在つて重きを爲して居た。

恰も此の危急の際、白軍はマアモントフの騎兵集團を縱橫に驅使して赤軍を到る所に擊破し、ウクライナは正に反ボリシエヴイキ派の手中に完全に落ちて行き相に見えた。そこで之に對抗する爲め、新に騎兵集團を作り、ブデイヨンヌイがその司令官、『ヴオロシロフがその最高政治部員となつた』のである。それからの南部軍は次第に元氣を取戻し、赤軍の內線作戰の成功と共に、白軍は次第に解消して、デニキン、ウランゲリの南方軍だけとなつて了つた。

一九二〇年九月内線作戰の主動部隊として東方戰線に偉功を樹てたフルンゼが、新に南方軍の總事令官となつた。そして、遂に最後のウランゲリ軍をクリム半島に追ひ込み、赤軍の最後の勝利、ソヴエート聯邦の基礎を確定したペレコープの戰に到るまで、ヴオロシロフはブデイヨンヌイ、スターリンと死生を共にして活躍した。

國内戰が終了してからの彼は、北コウカサス軍管區司令官に、次で一九二四年モスコウ軍管區司令官となり、一九二五年十一月フルンゼが病死すると、その後を襲つて軍の最高長官國防人民委員となり、今日まで十二年其職に在る。

彼は一度ウクライナ共和國内務人民委員となつたが、(一九一八年)その後は專ら軍事の研究に沒頭し今日では純然たる專門家となつた。彼はパルチザンを赤軍に改造して卓越せる頭腦を示した樣に、部隊指揮官としても秀拔な能力を謳はれ、更に初めはフルンゼを援け、後には自ら主となつて赤軍の建設に献身の努力を拂つて之亦驚異的の成績を擧げた。

其間彼は屢〻スターリンに反抗したが、然しトロツキー其他の及スターリン派に對しては極力スターリンを援けて、時には腰間のピストルを打つ放した事もあつた、といふこと

だ。恐らくは彼としては、心からスターリンを援けてゐるのだが、之こそ、昔からの『同志』として、スターリンと親しい餘り、さうして職務に忠實な餘り、時にはスターリンを恐れず反抗したのであらう。ピストルを振り廻したりするのは、彼がロシア人らしくなく純情一徹の癇癪持ちであつたからだ。

だから、スターリンも極端な獨裁ぶりに似合はず、彼を用ゐて渝らないのであらう。

赤いヴエルダンの籠城は、二人の二度目の共同生活であつた。

ヴオロシロフの家は代々ウクライナ地方の富農であつたが、彼の父は農業を好まず、恰も發展し始めたドン地方の工業に手を染めたが、落付いて一事業に勉勵するといふ樣な性格ではなく、馴れぬ仕事でもあつたので、失敗して放浪生活に入り、遂に鐵道番人となつた。母も女中などするやうになつた。クレメンテイ・エフレモヴイチ即ち彼れヴオロシロフはその間に生れた。

彼は七歳の時早くも日給十コペークを稼いで働かなければならなかつた。やがて工場に入つたが、天賦の才能は彼を忽ちにして立派な機械工にした。十二歳の時學校に通ひ始め

たが僅か二冬でやめて、又工場で勞働した。發明怜悧であつた彼の才を惜しんだ先生が、特別に、彼に種々の學科を敎へ、特に經濟や政治の智識まで與へた。

一八九八年、十七歳の時、徒黨を組んで官憲に反抗し、逮捕されたのが始まりで、それからは屢〻騷擾やストライキの牛耳を執り、遂に職業的革命家となつた。一九〇五年の革命では半死の苦刑に處せられた。次でまた勞働者となり、ルガンスク勞働者の代表者となつた。さうしてペテルブルグのボリシェヴイキと連絡を執り、そこで始めてレーニンに會つた。彼はレーニンの人格から強い感銘を受けて、之を崇拜するやうになつた。

一九〇七年キーエフ地方の黨大會の後又も捕へられてアルハンゲリスクに三年間流された。が彼は脫出してバクーに逃れ、そこでスターリンと知り、深く親交を結ぶことゝなつたのである。

彼には純正なロシア人の血が流れてゐる。だから彼は祖國を知り、民族を知つてゐる。彼は正義廉潔の士で、非道を憎み眞理を爭ふ時には長上權勢にも屈しない。職務の爲めには公私をはつきり區別して、決して私情に煩はされない。

彼が今日、軍部の最高位に長く居て、聲望スターリンに次ぐ、と云はれてゐるのには、革命の元勳であること、往くとして可ならざるなき才能と熱心なる研鑽とが彼を立派な軍事專問家としたこと、强い正しい性格等が然らしめてゐるのであらうが、百六十萬の赤軍將兵及び數百萬の在鄕兵から絕對の心服を得てゐるものは、彼が民衆の生活を最も良く理解し、その生活苦の削減に心を碎いてゐることを、大衆が知つてゐるからである、といふことだ。

兎まれ、彼は赤軍の大御所たるに恥ぢない。

三、元帥・ブデイヨンヌイ

白軍中のマアモントフの騎兵集團が枯葉を捲く疾風の如く赤軍を擊破して、遂にウオロネジを陷れ、赤軍本隊の背後に迫らんとした。所がマアモントフ軍はモスコウには向はないで附近を掠奪して故鄕へ歸つて了つた。

赤軍はホツとしたものゝ、何とかして之に對抗しなければならない。そこでハリコフ軍

管區司令官であつたヴオロシロフと南部正面軍指揮官であつたエゴロフは南部正面軍の軍事會議議長即ち總司令官であるスターリンに狀況を說明し、マアモントフに對抗すべき大騎兵集團を急速に編成する必要を說いた。スターリンは之を中央に要請し、レーニンは之を許可すると共にヴオロシロフを編成責任者に命じた。

ヴオロシロフは多くの指揮官中から、ドウメンコの指揮する騎兵團中の一師團長セメヨン・ブデイヨンヌイを發見した。彼こそ今を時めく騎兵監元帥ブデイヨンヌイであつた。

その時こそ既に師團長であつたが、彼は一八八三年土耳古人を母とする貧しいウクライナの農家に生れた。一九〇三年龍騎兵聯隊に入り、日露戰には上等兵として出征し、主として日系馬賊と對抗してゐた。歐洲大戰には曹長として各地に轉戰したが、革命と共に赤軍に投じた。彼はペテルブルグの騎兵學校を卒業し、乘馬に達してゐた。

かくして忽ちにして師團長に飛躍した彼はヴオロシロフに選ばれて新編騎兵第一軍の司令官となり、ヴオロシロフ革命軍軍事會議々長の副司令官となつた。(當時は軍事會議が革命軍の最高機關でその議長が總司令官であつた。ヴオロシロフがその最高政治部員となつ

たと云つてゐるが、當時に在つては政治部員が指揮官の上に在つたのだ)

彼の隷下の第一軍は、百姓、パルチザンの集り、赤系カザツク、カルイム族、チエルケス族、山賊團等を集成したのであつた。然し初めて編成が出來た時、中央革命軍事會議議長(即ち全赤軍の最高統帥者)トロツキーが閲兵式を行つた。その時トロツキーはブデイヨンヌイの手を握つて、

『如何なる音樂團も君の率ゐるこの騎兵團の大行進の如く整々堂々たる奏樂を爲し得るものはない』

とお世辭を云つた所、ブデイヨンヌイは、フンといふ顏をして、

『同志トロツキーよ、唯、直ちにマアモントフに對して前進せよと命じて呉れ、之こそ吾々が何よりも欲する所である』

と答へた、といふ事だ。

さうして彼は此の混成急造騎兵集團を率ゐてカストルナ附近にマアモントフ騎兵團を擊破した。彼はヴオロシロフが、最初に獨軍を敗つた樣に、その集團の威力をその作戰重點

に指向して成功したのであるが、彼は自ら、『赤軍（自分の騎兵第一軍）には何の傳統もなく、又戰略的のイロハも知らぬ下士官出の指揮官に率ゐられてゐたのだ。唯ウオロネジの占領が必要だといふ事と、戰爭は勝だと、それだけを肝に銘じて居たのだ』と云つてゐる。

彼は之に依つて一躍盛名を走せ、遂にペレコープにウランゲリ軍を殲滅する迄、勇奮力鬪したのである。

然し元來彼は勇猛放膽ではあつたが、戰略的頭腦がある譯ではなかつたから、彼のこの成功はヴオロシロフの力が與つて力あつたのではないだらうか。

『俺は戰爭が好きだ。マルキシズム、レーニズム、スターリニズム、それ等は暗誦してゐる』

と彼は言つてゐる想だ。然し快活で、物にこだわらない彼も、その後赤軍大學を卒業してゐる。赤軍内に人氣のある元帥だ。人々は彼を、『ソヴエート・マツケンゼン』と呼んでゐる。マツケンゼンは獨逸の名將だ。

四、元帥・トハチエフスキー

赤軍巨頭中唯一のロシア貴族出身の男だ。

彼は赤軍内に在つて『ソヴエートのナポレオン』と云はれて頗る人氣がある。容貌にも似た所がある、といふ。尤も奈翁は小男だつたが、彼は體軀堂々として風采の頗るよい男だ。一八九三年生れと云ふから年齒漸く四十三歳だ。

幼にして母を喪ひ田舍の別墅で他人に育てられた。佛人の乳母に育てられたので佛語をロシア語同樣に話す相だ。一族皆天才肌で彼の兄は數學家として、彼の妹は音樂家として相當著名であつた。彼も音樂を愛しヴアイオリンをよくした。

然し彼は幼時からナポレオンを夢見て幼年學校に入つた。モスコウの士官學校を卒業した途端に歐洲大戰が勃發した。彼は新品の歩兵隊長として出征した。彼は西南正面の戰場に於て至る所勇敢に戰ひ頗る機智に富んでゐたと云ふ事だ。

一夜、彼は重傷を負つて人事不省となつた間に獨軍の捕虜となつた。脫走を試みること

四回、遂に五回目に成功して瑞西に逃れた。其間に歐洲の天地には一大異變が起つた。それは赤色革命であつた。

そこで彼は、一九一七年の末にペトログラードに潜入したが、そこは混亂と恐怖の巷であつた。彼は途方に暮れてゐた。そこへ幼な友達が訪ねて來た。彼はボリシエヴイキーであつた。さうして彼に、『今ボリシエヴイキーに不足するものは才能ある軍事專問家である』と云つてボリシエヴイキー內軍事要員たらんことを力說した。かうして彼等は赤軍に投じ、漸次にその手腕を認められ、赤軍になくてはならぬ人物となつた。

彼が一擧にして令名を獲得したのは、對波蘭戰であつた。一九二〇年波蘭軍がキエフに侵入した時、レーニンは、赤軍を以て波蘭を一蹴し、その餘威を驅つて伯林、巴里、否倫敦まで席捲しやう、と主張した。當時最も有力であつたカメネフやザイオンチコフスキー等が皆その指揮官たることを辭退した、そしてトハチエフスキーは勇躍之に當つた。

彼は志氣沮喪したピルスドスキー元帥の波軍をヒタ押しに押してその首都ワルソウに迫つた。彼は歐洲を眞つ赤に塗り潰すのではないかとさへ見られた。が、ブデイヨンヌイの

騎兵集團の救援が間に合はなかつた爲めに、フランスの名將ウエイガン（フオッシュ元帥の信賴した將軍）の爲め遂にウイスラ河畔に一敗地に塗れ、彼の『赤きボナパルト』の夢も果敢なく破れた。

それにも拘らず、彼の將器將才は佛國の將官連をして舌を捲かしめた。さうして、トルキスタン軍管區司令官、陸大校長、西方軍管區司令官を歷任し、次でヴオロシロフの次官となつて事實上赤軍の統帥者となつてゐる。

今や彼はヴオロシロフの第一の後繼者を以て目せられてゐる。

五、元帥・ブリユツヘル

クレムリン殿の二三人、例へばスターリンとかヴオロシロフとか、かう云つた人々こそ知つてゐるかも知れないが、世間に凡そその正體の分つて居ないのは、極東軍司令官として、現在滿洲國境の向ふに居る大軍の統帥者として、ハバロフスクに頑張つてゐるブリユツヘルであらう。

今日のソ聯邦出現前の彼の經歷は全く不明である。教養高き舊帝政將校だとも云ふ。いや舊帝政の下士だとも云ふ。どうして全然一勞働者だと云ふものもある。さうかと思ふと有名なブリユツヘル將軍（獨逸の）の血を引いてゐるものだと誠しやかに云ふものもあれば、舊墺太利參謀少佐テイツクの變名であると見て來た樣なことを云ふ者もある。

が要するにその點は謎で、ソヴエート公刊の人物鑑によつて、大戰當時の一兵卒としておかう。

現在もモスコウ中央部に於て勢力を有するクイブイシエフが、沿ヴオルガ地方にボリシエヴイキの旗を上げた時に、サマラの聯隊から兵卒の代表として出席した男があつた。彼は寡言だが精力的で、人を牽きつける威容があつた。クイブイシエフは之に眼をつけて起用した。之が破れブリユツヘルだつた。

かうした彼は一九一八年オレングルグで白系のドウートフを擊滅したのを始めとして各地へ轉戰し、例のペレコープの役では、タフクセンティエフスキーの第六軍に在つて、第五十一師團を指揮し、ペレコープの正面を攻擊した。さうして干潮時を利用して敵の背面

に進出して戰勝の轉機を作つた。

彼を最も認めたのはトロツキーであつた。彼が名もなき一兵卒として一九一八年の夏オレンブルグ附近の白系軍をよく弱勢を以て掃蕩した時に、トロツキーは新に武功勳章の制度を制定し、その第一の動章を彼に與へたものである。そして彼は第五十一モスコウ師團の長となつたのである。

彼はその後も白軍掃蕩に從事し、遠く極東に進出して、ウンゲルン軍を潰滅せしめ、次でシベリア出兵後始末の大連會議に出席し、日本の撤兵後浦鹽に在つた。

それから、孫文が廣東に國民革命軍を起した時、ボロヂンと共にガロン將軍と變名して廣東に入り、支那革命軍を指導した。

その後彼は、スイルツオフがスターリン驅逐の陰謀を企てた時、彼はその豫想總聯邦人民委員代理に擬せられてゐた。その爲め彼も一時は處斷され相に見えたが、ヴオロシロフに救はれ、最も重大な極東軍司令官に補せられた。

彼を最も認めたものはトロツキーであつた。そのトロツキーは空しく却けられた。さう

して南露系のスターリン、ヴオロシロフ、ブデイヨンヌイ等が中央に威を張つて居り、同じく南軍出身ではあつたが、何となく別派の感ある彼が、極東に於て異心ありなどと、噂されるのも決して故なしとしない。彼は溫容を以て人に接するが、内心頗る精悍である。

六、其他の人々

参謀總長、エゴロフ元帥は、國内戰當時既にスターリンの下に南軍指揮官であつた、その爲め順押しの元帥となつたが、さしたる聲望はない。赤軍防空部長、カメネフ、陸大出身の帝政參謀將校。歐洲大戰には第一軍の作戰參謀、次でポルタワの聯隊長であつた。革命の際に兵卒から選ばれて聯隊長となつた。十月革命後赤軍に投じ、東南國内戰線に於てはエゴロフ等の下に作戰を掌り、天才的戰略家たるの手腕を現はした。赤軍檢閲使、參謀本部長、國防人民委員第二代理を經て現職となつた。其他優秀にして聲望あり注目を要する人物は、アルクスニス、エイデマン、コルク、ブートナ、ウヴオレヴイツチ、ヤキール、ヤディアキン、ペーチン、シヤポーシユニコフ等である。

（完）

『赤軍の全貌』
定價 金二十錢

昭和十一年五月二十七日 印刷
昭和十一年五月三十一日 發行

著者 三島康夫
編輯兼發行者 伊藤隆文 東京市芝區田村町四丁目十八番地
印刷者 青野仙吉 東京市芝區田村町四丁目二番地

不許複製

發行所 東京市芝區田村町四丁目十八番地 今日の問題社 振替東京五九七四八番 電話芝(43)三〇〇七番

發賣元 東京市神田區通神保町 上田屋
大阪市北區堂島上二の二五 新正堂

◇今日の問題社刊行書目◇

- 古澤磯夫郎著 海軍豫備會商決烈せば？ 價一〇 送二
- 清水盛明著 近代國防とソヴエート・ロシア（絶版） 價一〇 送二
- 陸軍パンフレット 經濟戰略・思想戰略 價一〇 送二
- 秋定鶴造著 政局はどう動く？ 價一〇 送二
- 松山二郎著 農村はどうなる？（絶版） 價一〇 送二
- 高橋龜吉著 インフレーション下の金融財政はどうなる？（絶版） 價一〇 送二
- 阿佐隆夫著 景氣は廻る 價一〇 送二
- 海軍省梅崎中佐著 五・五・三廢棄をめぐる列國の動向を探る（絶版） 價一〇 送二
- 陸軍パンフレット ロシアは如何にして極東に迫るか（絶版） 價一〇 送二
- 陸軍パンフレット 重壓下の日本と國防の強化 價一〇 送二
- 阿子島俊治著 內閣審議會とは何をする所か（絶版） 價一〇 送二
- 蓑田胸喜著 天皇機關說を爆發して國民に訴ふ（絶版） 特二〇 送二
- 永松浚造著 滿洲國皇帝を語る 特二〇 送二
- 松下芳男著 軍部前線に躍る人々 價一〇 送二
- 野田豐著 株式界の前途 價一〇 送二
- 楠公研究會編 密寶大楠公の遺訓書 價一〇 送二
- 熊崎健翁著 運に乘る法 特二〇 送二
- 蓑田胸喜著 一木樞相牧野內府の僧胥思想を糾彈す（絶版） 價一〇 送二
- 松下芳男著 軍部を裏から覗く（絶版） 價一〇 送二
- 國防研究會編 列强は如何にして支那を食ふか 價一〇 送二
- 高橋是清著 處世一家言 價一〇 送二
- 藤田信道著 東京附近夏山の旅 特二〇 送二
- 野田豐著 投資・利殖の必携 價一〇 送二
- 永松浚造著 豐太閤の處世術 價一〇 送二
- 松下芳男著 林銑十郎と眞崎甚三郎 價一〇 送二
- 村田清太郎著 重臣ブロックの正體（絶版） 價一〇 送二
- 菅原節雄著 陸軍の智腦九人男 價一〇 送二
- 金子堅太郎著 日本憲法の精神 價一〇 送二
- 松下芳男著 川島義之と渡邊錠太郎 價一〇 送二
- 小林順一郎著 軍部と國體明徵問題（絶版） 價一〇 送二
- 小林知治譯 ジャクソン式强體健康法 價一〇 送二
- 三島康夫著 制裁下のムツソリーニ沒落か 價一〇 送二

◇今日の問題社刊行書目◇

- 松下芳男著 荒木貞夫と阿部信行 價一〇 送二
- 片倉藤次郎著 日本はイタリーを支持して英米の壓迫に備へよ 價一〇 送二
- 長谷川了著 裏から見た歐洲の外交戰 價一〇 送二
- 村田孜郎著 北支獨立運動の眞相 價一〇 送二
- 林勇造著 政局線に於ける軍部の動き 價一〇 送二
- 天沖鄕廟著 蔣政權の行方と迫れる日英戰爭 價一〇 送二
- 小泉二十著 外交陣をめぐる軍部と外務省 價一〇 送二
- 原房之助著 國體宣揚と重臣ブロック（絶版） 價一〇 送二
- 經濟問題研究會編 サラリーマンは何處へ行く？ 價一〇 送二
- 三島康夫著 日支衝突必然論 價一〇 送二
- 石山賢吉著 金持に學ぶ 價一〇 送二
- 高橋是清著 半生の體驗 特二〇 送二
- 藤原銀次郎著 產業日本の進路 價一〇 送二
- 野村京太郎著 軍部・官僚・政黨 價一〇 送二
- 蓬田武著 どうすれば選擧違反にならないか 價一〇 送二
- 牧野元次郎著 人生金儲け修業 價一〇 送二
- 菅原節雄著 政權は誰が動かすか 價一〇 送二
- 長谷川了著 急迫せる日ソ關係 價一〇 送二
- 三島康夫著 日露再び戰ふか 價一〇 送二
- 矢野恒太著 人生學第一課 價一〇 送二
- 永井三郎著 現代軍部論 特二〇 送二
- 三宅一郎著 陸軍と內閣調査局革新政策早わかり 價一〇 送二
- 齋藤二郎著 ソ支共同抗日戰 價一〇 送二
- 天沖鄕廟著 日ソの危機を探る 價一〇 送二
- 野村重太郎著 新官僚の陣容を語る 價一〇 送二
- 松下芳男著 宇垣一成と南次郎 價一〇 送二
- 三島康夫著 赤軍の全貌 特二〇 送二
- 永松浚造著 池田成彬傳 特一〇 送二
- 多喜一郎著 貴族院改革問題 價一〇 送二

◎既刊書御注文は、すべて前金にて御願ひ致します。御申込は本社直接又は最寄書店へ。送金は振替又は郵便切手のこと。月報『今日の問題』『新刊通知』『直接購讀規定』御入用の方は御申出下さい。

パンフレット愛讀者に急告!!

今日ではパンフレットは讀書界になくてはならぬ存在となりました。新聞でも雜誌でも、もとより單行本でも得られない社會の事が急速に、簡單に、直截に、しかも、僅か十錢といふ安い値段で、或は旅行の車中で、或は通勤の電車の中で、或は僅かの休憩の時間に、何時、如何なる所でも、迅速、適切、公正なる知識が求められる所に、パンフレットの最大特長があります。

わが社は愛讀者各位の御期待に添ふやうに、常に時局への急速適切なる對應、內容充實、權威と信用とを唯一のモットーとして、編輯に多大の苦心と注意とを拂つて居ります。今後、各位の御鞭撻を御願ひします。

パンフレットは、毎月三冊以上發行致します。全國の書店、鐵道各驛賣店にて發賣して居りますが、地方で御不便の方、若しくは、殖民地方面の方は、是非本社直接の御購讀を御すゝめ致します。非常な御便宜があります。直接購讀の御申込は、其旨ハガキで本社へ御申込になれば、新刊の都度御送本致します。又、御住所、御氏名を御通知下されば、新刊通知、月報も差上げます。直接購讀規定御入用の方は御一報次第、御送り致します。

此際、切に直接購讀を御すゝめ致します。

月報『今日の問題』無代進呈

時局は一層深刻化して行く、內に國內改造問題あり、外に日ソ紛爭、對支問題あり、一體日本はどうなるか、とさへ思はせるものがある。

頻發する諸事件、各種の問題。それ等は何人もが一應は知つて置かねばならぬ問題ばかりである。しかし今日の新聞雜誌では或はニュースの推移に煩はされ、或は發行期日に束縛されて、讀者に滿足を與へるだけの時局への對照を行ふことは不可能である。

わが社のパンフレットは、常に時局の推移、社會の動向、時流の變化を洞察して、權威ある專問筆者陣によつて、時局問題を適切公正に解明し、其の將來への見透しを立てゝ、新知識を供給しつゝあります。

今回、パンフレット愛讀者との間に一層緊密なる連絡をとり更に平素の御支援に感謝せんとして、月報『今日の問題』なるリーフレットを發刊致しました。希望者は、何人にも毎月無代にて進呈致しますから、ハガキにて住所、御氏名を御しらせ下さい。

國防研究會編　四六版百五十頁　並製清裝　特價二十錢（送料二錢）

近代國防論

＝軍部の抱懷する國防觀と國防政策＝

◇近代國防とソヴエート・ロシア
◇重壓下の日本と國防の强化
◇經濟戰略・思想戰略

本書は讀者の御便宜のために、本社で今までに發行した陸軍省パンフレット收錄のもの三册を其のまゝ合本收錄して發行したものである。

軍部と國防問題に關する出版物の少い今日に於て、本書は必ずや各方面の御好評をうけるものと信ずる。特に目下國內の問題となつてゐる軍部の國防政策、國內改造政策を知るに唯一の資料である。賣切れぬうち即刻入手せよ！　特に『重壓下の日本と國防の强化』は、かつて陸軍省新聞班に於て發行され、世上論議の中心となつて、大問題を起した『國防の本義と共の强化の提唱』に更に其の重要なる前編をなす『躍進日本と列强の重壓』の二册を合輯したもので、未だ其の內容を讀まれない方は、此の際、是非、御申込あらんことを。書店と驛賣店にあり、本社直接切手代用可。

今日の問題社　東京市芝區田村町四の十八　振替東京五九七四八番

◇愛讀者各位へ四ツの御しらせ◇

第一……パンフレットは時代の中心を最尖端に立つて行く最近代的出版でありまして雜誌でも新聞でも得られない知識が遺憾なく收められて、迅速、適切しかも最低廉價で求められる所に特長と近代性があり、非常なる好評を受けて居ります。全國各驛賣店、各書店にて發賣して居りますが、地方で賣店に御不便の方は、本社直接の御購讀を御すゝめ致します。ハガキで御申込み次第、購讀規定進呈。

第二……本社機關紙『今日の問題』（毎月一回）は讀んで面白い豆新聞だとの御好評です。何人にも無代で進呈致しますから本社直接御申込み下さい。

第三……從來、特志希望者中心で組織して居りました『時事問題を專門家に聽く懇話會』を、今回一般希望者に公開して、會員を募集することに致しました。毎月一回、東京市內の適所に會食して、話を聽くといつた、なごやかな會です。希望者は本社へ御問合せ下さい、會則を進呈します。

第四……オオコンリオンといふ近代稀に見る實際に効目のある營養健康劑を發見しましたので、本社で發賣普及することに致しました。從來いろ〳〵なものを試用しても効目のない方、絕大な健康を保持して、大いに雄飛せんと希望さるゝ方は、一度試用して見て下さい。

永井三郎著　四六版・百頁　並製・清裝　特價二十錢（送料二錢）

現代軍部論（新刊）

―軍部と其の改革思想―

二・二六事件以來、急角度の非常時深刻化と共に、巨大なる軍部の姿が日本の思想線上に浮び上つた。それは行詰れる日本の現狀を改革して、一切の積弊を一掃し、斷固として國民生活向上、國防充實、日本精神宣揚の偉大なる實力である！

而して、其の改革思想とは何か？其の具體案は何か？本書は此の問題に明答を與へんとしたもので、著者は權威ある陸軍大尉にして、多年此の方面に於ける研究をつゞけて來た人。刻下讀書界の最大緊急の要求に對應せんとのしたものである。（書店に品切れの節は直接本社へ）

今日の問題社　東京市芝區田村町四の十八　振替東京五九七四八番

三宅一郎・松本春二共著　定價十錢（送料二錢）

陸軍と内閣調査局　革新政策早わかり

陸軍と内閣調査局では、國内改革を、如何なる具體案によつて斷行せんとしてゐるか？　我々の生活はどうなるか？

恐らく此の問題は、目下何人も知りたい問題であらう。統制經濟といひ、强力政治といはれてゐるが、果して、どうなつて行くのか？

本書は、これらの問題を解説的に書いたものとして、唯一のものであつて、刻下何人も一讀して、國民生活の將來に、はつきりと見透しをつけて置くことが必要である。

今日の問題社　東京市芝區田村町四の十八　振替東京五九七四八番

高橋是清翁二大名著

新刊

半生の體驗

四六判・清裝
定價二十錢（送料二錢）

高橋翁の半生の體驗談だけは、誰もが、しみ〴〵と聞いて見たいと思ふであらう。今日までに斷行的には傳へられてゐるが、ほんとうに、あの苦難、曲折、しかも貴重なる翁の身を以て體得せられた直話は語られたことがない。本書ではこれを、あゝいふこともあつた、こんなこともあつたと、ポツリ〳〵と語つて居られる。一代の名著、それだけに、一氣に讀まづには居られない。

百版

處世一家言

翁の體驗から割り出された貴重なる處世訓であり、サラリーマンへの注意書として、出版以來日本全國を風靡した書である。これまさに國民讀本として本書以上のものはあるまい。人を使ふ人は、これを社員や店員に讀ませずに置いたら大きな損をする。人に使はれてゐる者はこれを讀まなかつたら出世のチャンスを失ふ。今すぐ申込め!!

四六判・六十四頁・並製　定價十錢（送料二錢）

今日の問題社
東京市芝區田村町四の十八
振替東京五九七四八番

旬刊新よみもの雜誌

國王の話

第二號　定價十錢

皆樣が日常御經驗なさる事柄の話、身上話、うちあけ話、ないしよ話、なぞ世間にあるあらゆる話はすべて輯めてあります。輕い肩の凝らない讀物のうちに生きた社會學も含まれてゐるようものです。販賣は全國省線私鐵の驛賣店を主として、書店、ホーム、街頭新聞スタンドで賣つて居ります。せい〳〵御愛讀願ひます。

東京　發行　國王の話社
東京市麹町區有樂町二ノ二
振替東京八八四三番

伯爵　金子堅太郎著　定價十錢（送料二錢）

日本憲法の精神（新刊）

本書は、過般文部省主催の下に開かれた「憲法講習會」に於ける金子堅太郎伯の『帝國憲法制定の精神と歐米政治家並に學者の評論』といふ講述の全内容の速記に、金子伯の補筆を乞ふたものを、特に文部省の許可を得て本社が出版公表したものである。

所謂「機關説」問題をめぐつて憲法學説に紛議のある折柄帝國憲法起草者中、只一人の生存者たる金子伯の『日本憲法の精神』は是非誰もが一讀すべきものである。

各官廳、學校、陸海軍各隊、公共團體等にて、多數希望者を取まとめて御申込あらんことを乞ふ。割引の御相談に應じます。

申込所　東京市芝區田村町四の十八　電話芝三〇〇七番　振替東京五九七四八番　今日の問題社

日・ソ・支の問題を知らんとする人に

日本外交協會三島康夫著　赤軍の全貌（其戰略と巨頭）　特價二十錢　送料二錢

天沖郷廟著　日ソの危機を探る　定價十錢　送料二錢

齋藤二郎著　深刻化するソ支共同抗日戰　定價十錢　送料二錢

日本外交協會三島康夫著　日露再び戰ふか　定價十錢　送料二錢

日本外事協會長谷川了著　急迫せる日ソ關係　定價十錢　送料二錢

日本外交協會三島康夫著　日支衝突必然論　定價十錢　送料二錢

天沖郷廟著　蔣政權の行方と迫る日英戰爭　定價十錢　送料二錢

善隣協會村田孜郎著　北支獨立運動の眞相　定價十錢　送料二錢

今日の問題社　東京市芝區田村町四の十八　振替東京五九七四八番

ダイヤモンド社長 石山賢吉著 定價十錢（送料二錢）

金持に學ぶ（新刊）

本書中に登場する人物

福澤桃介。團琢磨。三井家。岩崎家。安田善次郎。莊田平五郎。藤原銀次郎。武藤山治。古河市兵衛。津田信吾。小林一三。福島浪藏。杉野喜精。淺野徳一郎。

金をためたい人 金を儲けたい人 事業に成功したい人 出世をしたい人 は是非一讀すべき書である

此の書は、世の金持に共通な心理と要素を拾ひあげて、彼等はどうして金を殘し、立身成功したかを研究したものである。そうして世の金持といはれる人々の、私生活、事業生活は、どんなにやつてゐるかを紹介したものであつて、讀物としても面白い。著者石山さんは、『金持はケチである』と斷じてケチといふことゝ金と人生とを說いてゐる。面白い本だ!!

今日の問題社
東京市芝區田村町四の十八
振替東京五九七四八番

自己を持する人に嚴しなるとんらな人に奬む

高橋是清翁著 **處世一家言** 定價十錢 送料二錢
高橋是清翁著 **半生の體驗** 特價二十錢 送料二錢
第一生命社長 矢野恒太著 **人生學第一課** 定價十錢 送料二錢
不動貯金頭取 牧野元次郎著 **人生金儲け修業** 定價十錢 送料二錢
ダイヤモンド社長 石山賢吉著 **金持に學ぶ** 定價十錢 送料二錢
經濟問題研究會編 **サラリーマンは何處へ行く** 定價十錢 送料二錢
ジャクソン博士著 小林知治譯 **ジャクソン式强體健康法** 定價十錢 送料二錢
吉川荒村著 **夫婦讀本** 特價三十錢 送料四錢
楠公研究會編 **密實大楠公の遺訓書** 定價十錢 送料二錢
熊崎健翁著 **運に乘る法** 定價十錢 送料二錢

今日の問題社
東京市芝區田村町四の十八
振替東京五九七四八番

強腦強精滋養強壯

オオコンリオン

日本人特有の米食習性と酸性土壌によるヴイタミン並にカルシウムの營養缺陷を補ひ、精力減退の防止と生活力充實に必要な強力ホルモンを補給する驚くべき偉效！

【適應症】早老現象・老衰・內分泌機能の減退・常習頭痛・ヒステリー・神經衰弱・結核性諸症・肋膜炎・貧血・虛弱體質・糖尿病による機能衰退・產婦・病後の衰弱・〇萎・〇感症・性慾減退・あらゆる營養劑を用ひて尙不滿を有する人、メキ〳〵と目に見えた效目を望む人は是非一度！

本劑一粒は普通肝油の三十瓦、鷄卵十五、牛乳三升に匹敵す

定價
壹圓五拾錢
參圓
八圓五拾錢
拾參圓

發賣 東京市芝區田村町四の十八
振替東京五九七四八番
今日の問題社